

京都府埋蔵文化財情報

第115号

木津川市上粕北遺跡(第2次)の発掘調査	筒井崇史	1
平成22年度京都府の文化財調査	石井清司	5
恭仁京造営史(上)	伊野近富	11
人面付き土器の系譜(上)	岩松 保	17
平成22年度発掘調査略報		25
20. 三ノ宮東城跡		
21. 園部城跡		
22. 山崎津跡		
23. 長岡京跡右京第1008次・松田遺跡		
24. 椋ノ木遺跡第9次		
25. 美濃山廃寺下層遺跡		
発掘余話第4回 理化学分析と考古学		34
長岡京跡調査だより・111		40
普及啓発事業		42
組織および職員一覧		44
センターの動向		45

2011年8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

木津川市上狛北遺跡（第2次）の発掘調査

筒井崇史

1. はじめに

上狛北遺跡は、京都府木津川市山城町上狛宝本・西浦代に所在する。木津川右岸の沖積地に位置し、調査前の現況は水田であった。上狛北遺跡周辺には多くの遺跡が分布する(第1図)。弥生時代では、後期の堂ノ上遺跡・椿井遺跡・上狛西遺跡などの集落遺跡がある。古墳時代では、前期に、三角縁神獸鏡が30面以上出土した椿井大塚山古墳(前方後円墳、全長175m)や平尾城山古墳(前方後円墳、全長110m)が築造される。中期末には上狛北遺跡の東方の丘陵上に小規模な前方後円墳である天竺堂1号墳(全長27m)が築造される。飛鳥時代では、古代寺院の1つである高麗寺が造営される。奈良時代には、具体的な遺構は未確認であるが、恭仁京右京推定地とされている。また、当該期の遺構が上狛東遺跡で確認されている。

今回の発掘調査は、主要地方道上狛城陽線の建設工事に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。平成21年度(第1次)調査で顕著な遺構が確認された地点を、調査対象地全体に、調査区を広げて調査を実施した。現地調査期間は平成22年8月24日から平成23年3月9日まで、調査面積は1,630㎡である。

2. 調査概要

調査は現在の里道を挟んで大きくA地区とB地区の2か所に分けて実施した(第2図)。調査の結果、検出された遺構の時期は、大きく中世前半、奈良時代、古墳時代の3時期がある。特に重要な成果のあった奈良時代の遺構・遺物を中心に報告する。

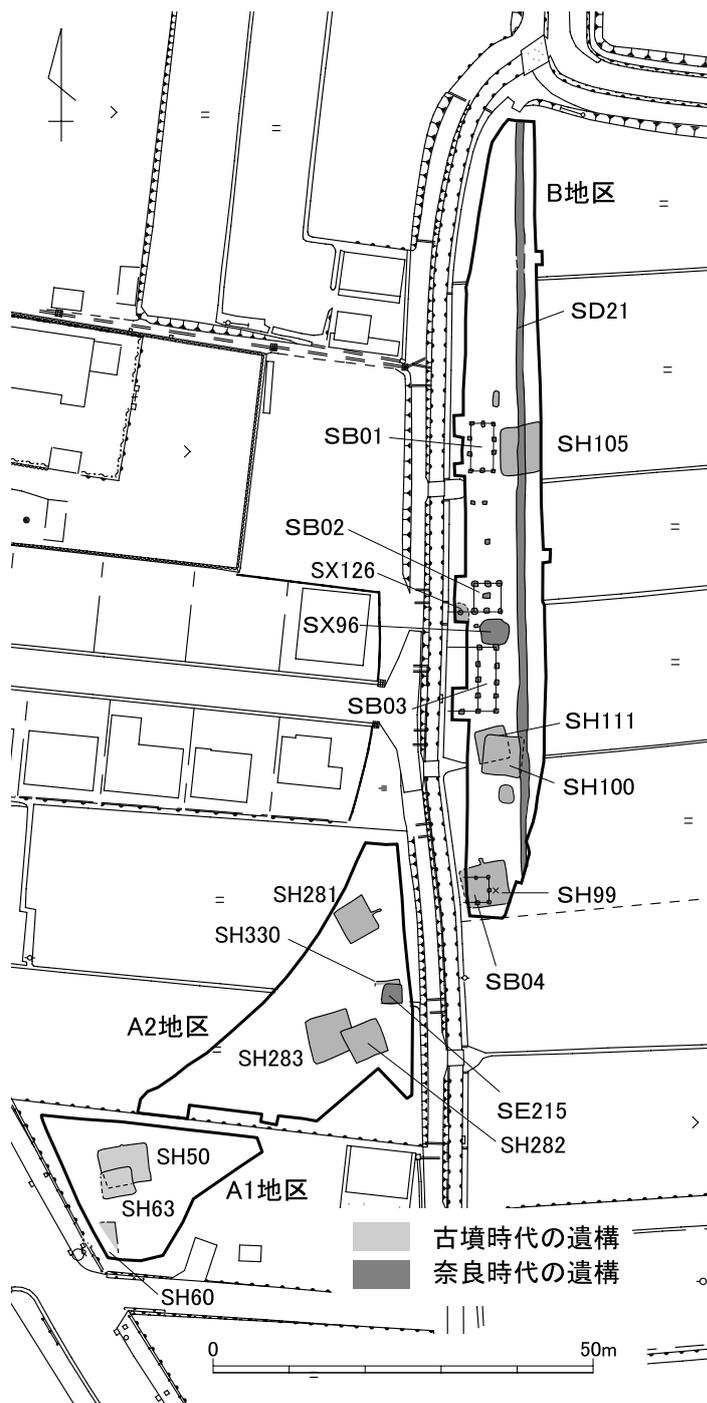
①A地区 中世の遺構として、掘立柱建物跡2棟のほか、多数の柱穴・土坑・耕作溝を検出した。出土した土器から11世紀後半～13世紀ごろの遺構と考えられる。

奈良時代の遺構は後世の削平が著しいためか、素掘りの井戸(S E 215)のほか、小規模な土坑や柱穴などを少数検出したにとどまる。

古墳時代の遺構として、竪穴式住居跡7基を検出した。住居跡はいずれも方形の平面プランを呈し、5基で造り付けのカマドを確認した。このうち、S H 282・330ではカマドの煙道が住居の



第1図 上狛北遺跡周辺主要遺跡分布図
(国土地理院 1/50,000 奈良)



第2図 調査地配置図

壁面に沿って延びていくという特徴がみられた。これは「L字形カマド」や「オンドル状遺構」と呼ばれるもので、渡来人とのかかわりを示すと考えられる。

これらの住居跡からは須恵器や土師器、滑石製白玉などが出土した。出土した遺物から、古墳時代中期後半～後期前半に位置づけられる。

②B地区 中世の遺構として、多数の耕作溝を調査区全域にわたって検出した。出土した土器から12～13世紀ごろの遺構と考えられる。

奈良時代の遺構として、南北方向の溝1条(SD21)、掘立柱建物跡4棟(SB01～04)、土坑1基(SX96)などを検出した。このうちSX96では、木簡・墨書土器などの重要な遺物が出土した。これらについては項を改めて報告する。

SD21は調査区を南北に縦断する溝で、総延長100mで、幅0.7～1.1m、深さは0.1～1.0mを測る。溝からは多数の須恵器や土師器、瓦などが出土した。出土した土器は、その特徴から平城宮土器Ⅳの段階に位置づけられる。なお、調査区内で、SD21に直交するような溝や柵などの遺構

は確認できなかった。

SB01は、柱間が不揃いであるが、東西2間(2.8m)、南北5間(10.5m)の建物跡である。SB02は東西2間(3.4m)、南北1間(3.6m)の建物跡である。ほかの建物にくらべ柱間がやや広い。建物跡の性格は不明である。SB03は東西1間(2.4m)以上、南北4間(8.4m)の建物跡で、少なくとも東側に庇を持つことを確認した。身舎の大半は調査区外に位置すると考えられる。SB04は東西1間(1.6m)以上、南北2間(3.3m)で、東西方向の建物跡と推定される。

建物跡からの出土遺物は少ないが、SD21とSB01～04は、方位をおおむね正方位に揃えてい

ることから、同時期の遺構と考えられる。

古墳時代の遺構として、竪穴式住居跡4基と土坑3基などを検出した。住居跡はいずれも方形の平面プランを呈する。3基で造り付けのカマド確認した。出土遺物としては土師器や須恵器があるが、A地区の住居跡にくらべて少ない。時期はA地区と同じ古墳時代中期から後期にかけてと考えられる。また、3基の土坑のうち、S X126では、縄蓆文をもつ陶質土器または初期須恵器の甕1点が大量の布留式土器とともに出土した。古墳時代中期初頭前後に位置づけられる。

3. 土坑S X 96 と出土文字資料

S X96は、掘立柱建物跡S B02・03に先行して掘られた土坑で、大量の遺物が出土したことから廃棄土坑と考えられる。S B02・03は、S X96を埋め立てた後に建てられている。S X96は一辺3m程の平面方形を呈し、深さ約2mを測る。埋土は、下層から木簡を含む木屑層、遺物を大量に廃棄した炭層、土坑を最終的に埋め立てた埋土の、大きく3層に分けることができる。木屑層と炭層の間には若干の堆積層が認められた。

出土遺物としては、木簡・墨書土器などの文字資料のほか、須恵器や土師器、瓦埴、鉾滓などが出土した。瓦埴類のうち、埴が少量ながらも出土している点は注目される。軒瓦はほとんどなく、平瓦・丸瓦が多く出土している。ただ、いずれにしても屋根を葺くほどの量ではない。土器類は、土師器・須恵器とも、杯・皿類とその蓋が大半を占め、壺・甕などの貯蔵具や煮炊具は少ない。土師器では内面に1段斜放射暗文と螺旋暗文を施すものが大半で、連弧暗文を施すものが少なからず認められる。須恵器では高台付杯で大型の法量のもものが認められるなど、平城宮・京に類似した特徴がみてとれる。S X96出土土器はその特徴から平城宮土器Ⅲ古段階に位置づけられる。この点はS X96と建物群との層位的な関係と矛盾しない。

今回の調査で、最も重要な成果となるのが木簡の出土である。調査で確認した木簡は、文書木簡1点(第3図1)、荷札木簡と推定されるもの1点(第3図2)、習書木簡の断片1点のほか、習書木簡の削り屑約40点がある。1は全長19cm、幅1.1cm、厚さ1～4mmを測り、「讃岐國鷓足郡少領□」と判読できる。□以下は木簡の表面が削られているため、内容等は明らかでない。2は全長14cm以上、幅最大1.7cm、厚さ1～2.5mmを測る。赤外線カメラによる釈文は「海戸主海八目戸服部姉虫女米五斗」と判読できる貢進木簡である。習書木簡や削り屑には「草萬荒蘇」や「長長」、「連連」と判読できるものがある。



第3図 出土木簡（赤外線写真）
撮影：独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

墨書土器は31点確認しており、土師器が13点、須恵器が18点である。墨書の大半が杯・皿類の底部外面に書かれており、須恵器鉢や同蓋の内面の例が1、2点ずつある。判読できる文字として「代」、「昨女」、「若女」、「匠」、「石」などがある。このうち、「代」は可能性のあるものも含めて20点ほど出土しており、全体の6割以上を占める。ただし、現時点で「代」の意味するところは不明である。

4. まとめ

今回の調査では、古墳時代・奈良時代・中世の各時期の遺構・遺物を検出した。このうち奈良時代の遺構・遺物はその内容から見ても重要な成果である。

まず、南北方向の溝 S D21は、総延長100m以上を測ることから、計画的に掘削された溝と考えられる。この溝は、その西側で検出された建物群を区画していると考えられるか、あるいは東側に同様の溝があって、道路遺構となる可能性もある。建物群は、建物の規模が小振りであるものの、正方位を指向して配置されている。

一方、建物群に先行する土坑 S X96では、平城宮出土の土師器や須恵器と比較しても遜色ない土器群や、木簡・墨書土器などが多数出土している。第3図1は、正確な内容は不明であるものの、讃岐国の郡司が文書をやり取りするような木簡であり、第3図2は貢進元は不明であるが、女性による貢進木簡で類例は非常に少ない。地名と思われる1字目が略記されていることも合わせると、上狛北遺跡は一般的な集落や地方官衙の可能性よりも、むしろ都城、特に京城における私的な施設の可能性があると思われる。

こうした点で遺構の時期をみると、S X96は平城宮土器Ⅲ古段階、S D21は平城宮土器Ⅳの時期に位置づけられ、前者は恭仁宮遷都直前を含む天平年間前半、後者は淳仁・称徳朝と考えられる。S D21の掘削時期は不明であるが、上述のように建物と溝の一体性を考慮すると、溝の時期がS X96を大きく遡ることはないと思われる。

以上のような点から、S D21掘削の契機を恭仁宮遷都や恭仁京の造営といったものに求めてもそれほど無理があるとは思われない。また、S X96の性格も京城や私的施設の造営に伴う可能性も考えてもよいだろう。

今回の調査では、恭仁宮が営まれたのとほぼ同時期の遺構を検出することができた。これによって、その存在が疑問視されがちであった恭仁京京城について、存在する可能性をはじめて示すことができたといえよう。また、S X96から出土した木簡も、遺構の性格を評価する上では重要な成果といえよう。

今回は、調査成果の一部を述べたもので、詳細は現在実施している整理作業の成果をうけて刊行する予定の報告集に委ねたいと思う。

(つつい・たかふみ = 当調査研究センター調査第2課第3係調査員)

平成22年度京都府の文化財調査

石井清司

平成22年度の当埋文センターが実施した発掘調査事業件数は、丹後地域4件、丹波地域6件、乙訓地域8件、北山城地域3件、南山城地域8件と総数29件を数え、例年になく調査件数は増加した。地域別にみると、例年のように第二外環状道路関係遺跡や府道に関連して乙訓地域(長岡京跡関連遺跡)の調査件数が多いものの南山城地域・丹後地域での調査が増加した。時期別にみると、今年度は特に古墳時代の古墳及び横穴群が6件、古墳時代の集落遺跡3件と古墳時代の調査件数が増加した。

ここでは、当埋文センターの調査成果とともに、市町教育委員会の発掘調査成果を含めて現地説明会資料を参考に略述する。

〈丹後地域〉

丹後地域では、竹野川上流域(京丹後市大宮町)の松山遺跡、同大内北古墳群のほか、竹野川下流域(京丹後市弥栄町)の鳥取橋遺跡(第1次・第2次)の発掘調査を実施した。そのうち、鳥取橋遺跡では竹野川の河川堆積の状況と一部遺物を検出したのみである。

京丹後市^{まつやま}松山遺跡(第4次) 府営ほ場整備事業に伴って発掘調査を実施したもので、竪穴式住居跡などは検出していないが、調査地の西側A・Bトレンチで縄文時代から中世に至る時期の縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・白磁・青磁・銭貨・石器など多種多量の遺物が出土した。近接して発掘調査を実施した京都府教育委員会調査地点(第5次調査)、京丹後市教育委員会調査地点(第6次調査)では古墳時代前期から中期の竪穴式住居跡を検出している(平成22年9月23日現地説明会)。

京丹後市^{おおうちきた}大内北3号墳 大内北古墳群では5基の古墳状隆起を対象に発掘調査を実施したところ、4基(1・2・4・5号墳)は墳丘及び埋葬施設が確認できず、3号墳のみ古墳であることが明らかとなった。大内北3号墳は東西24m、南北20m、高さ4.5mの円墳で、墳頂部に竪穴式石槨・組合式箱式石棺・木棺など9基の埋葬施設を確認した。埋葬施設内からの出土遺物が少なく、埋葬施設1の竪穴式石槨内から槍先とノミ状鉄器各1点、埋葬施設8の木棺から鉄鎌1点が出土し、4世紀後半から5世紀にかけて築造されたことが明らかとなった(平成22年9月23日現地説明会)。

〈丹波地域〉

丹波地域では、中・近世の城跡の調査4件のほか、弥生時代集落・古墳の調査を実施した。

舞鶴市^{なかやまじょう}中山城跡 一色氏が城主であったともいわれている中山城跡は連郭式の山城で、今回の調査は、本丸(標高約60m)の2つ南側の広い郭部分での発掘調査を実施した。その結果、頂部にある郭1-1では掘立柱建物跡4棟と郭の北端で柵列を、郭1-1の下位にある郭1-2、1-3、1-

4でそれぞれ柱穴を検出した。出土遺物には中国製白磁皿・椀、染め付けのほか、丹波焼の甕などが出土した。出土遺物から、中山城跡は16世紀中葉に造られ、17世紀初頭には廃絶していることがわかり、この地を治めた在地豪族である一色氏の居城が、織田信長による丹波攻略の一環として細川氏関連の城へと転換した様子が明らかとなった(平成22年8月28日現地説明会)。

京丹波町^{いわけじょう}井脇城跡 標高270mの独立した尾根(A地区)とA地区から北東側につづく平坦面(C地区)、A・C地区とは谷を挟んだ北側のB地区の3か所で発掘調査をおこなった。A地区では人為的に削り出された16×18mのいびつな方形の平坦面とその縁辺部で最大幅2.5m、高さ0.8mの土塁を検出した。B・C地区では建物などの遺構は検出されなかったが、平坦面を造成していることから見張りなどの施設が存在したものと想像される。井脇城跡の城主は不明だが、城の縄張りや出土遺物から室町時代後期にこの地を治めた土豪により築城されたものと考えられる(平成22年6月12日現地説明会)。なお、井脇城跡の発掘調査とともに同じ丹波町にある三ノ宮東城跡の地形測量調査を丹波綾部道路建設に伴い実施した。

京丹波町^{しおたにみなみ}塩谷南古墳 井脇城跡・三ノ宮東城跡とともに丹波綾部道路建設に伴い発掘調査を実施したもので、塩谷南古墳の北側には巫女形埴輪2体が出土した塩谷古墳群が存在する。塩谷南古墳は直径15mを測る円墳で、墳頂部から割竹形木棺(第1埋葬施設)と組合式木棺(第2埋葬施設)の埋葬施設を2基検出した。第1埋葬施設からは鉄鏃が、第2埋葬施設の棺内からは鉄剣1振・鉄製刀子1点のほか漆製品が、墓坑内からは須恵器壺1点とその周りに有蓋高杯がまともに7点配置された状況で出土した。出土遺物から6世紀初頭に築造されたものと思われる(平成23年1月15日現地説明会)。

南丹市^{そのべしやう}園部城跡(第8次) 今回の調査地は園部城跡の本丸北部分にあたり、検出全長18mの空堀と空堀の内側で南から北にかけての土橋、空堀につながる石組溝を検出した。園部城ではいくつかの絵図が残っているが、発掘調査でみつかったような本丸が空堀によって2か所の曲輪に分かれている様子は描かれておらず、絵図にはない状況が明らかとなった(平成23年2月26日現地説明会)。

南丹市^{のじょう}野条遺跡(第17次) 弥生時代後期の溝7条、奈良から平安時代にかけての掘立柱建物跡2棟を検出した。野条遺跡ではこれまでに弥生時代後期の竪穴式住居跡が数基みつかっており、今回検出した溝はムラの外周部に掘られた溝と考えられる(平成22年11月23日現地説明会)。

〈乙訓地域〉

乙訓地域では、(財)向日市埋蔵文化財センター・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・大山崎町教育委員会などにより長岡京跡の発掘調査が実施されており、その調査概要は「長岡京跡調査だより」で紹介しているところである。ここでは当調査研究センターで実施した調査と現地説明会が開催された遺跡について紹介する。

長岡京市^{いげのやま}恵解山古墳(第11次調査) 古墳時代中期の乙訓地域を代表する恵解山古墳(全長128m、後円部の直径78m、前方部幅76m)では、東造り出し部の全容を明らかにするために発掘調査を実施し、東造り出し部の南北幅が約18m、周濠への張り出しが約14mで、これまでに判明し

ている西造り出し部よりも一回り大きいことが判明した(平成22年7月31日現地説明会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター実施)。

大山崎町^{ながおききょう}長岡京跡右京第997次・^{まつだ}松田遺跡 第二外環状道路に関連した調査で、これまでの周辺調査では古墳時代の集落跡を検出している。今回の調査地では小泉川の氾濫によって古墳時代の集落は削られた可能性が高く、小泉川によって堆積した砂礫を多く含む基盤層に築かれた中世の集落遺構を検出した。検出遺構は掘立柱建物跡4棟のほか、柵列・井戸などがある。各掘立柱建物跡・井戸・溝・土坑からは13世紀～14世紀にかけての瓦器・土師器・青白磁などが出土し、古代末から中世の有力者の屋敷地跡と思われる(平成22年8月29日現地説明会)。

大山崎町^{ながおききょう}長岡京跡右京第1008次・^{まつだ}松田遺跡 右京第997次調査の東側で、府道に関連した調査を実施した。この調査では右京第997次調査で検出した13世紀～14世紀にかけての掘立柱建物跡群はみつからなかったが、素掘りの井戸3基、溝などを検出した。また、この調査地点は小泉川の氾濫が影響していなかったようで、古代・中世の遺構面の下層で、古墳時代前期の竪穴式住居跡のほか、縄文時代・弥生時代の土坑・溝などを検出した(平成23年2月26日現地説明会)。

長岡京市^{すずたに}鈴谷遺跡 第二外環状道路に係る調査で、昨年度の調査で確認していた古墳の石室(SX01)の石室内部の状況と周辺で出土した古墳時代前期の家形埴輪を含む包含層の広がりをも明らかにするために発掘調査を実施した。その結果、石室(SX01)は横穴式石室で、全長3.5m(玄室長2.0m、羨道部1.5m)、幅0.6mを測り、石室床面で7世紀中頃の土師器甕、須恵器杯・蓋が出土し、周辺地域でのもっとも新しい時期の古墳であることが明らかとなった(平成22年10月16日現地説明会)。

長岡京市^{ながおききょう}長岡京跡右京第1006次調査・^{ちようし}調子遺跡 鈴谷遺跡と同様、第二外環状道路に関連した調査で、昨年度の調査と同様、弥生時代の旧河道、中世の掘立柱建物跡1棟のほか、柱穴や井戸跡を検出した。

長岡京市^{ながおききょう}長岡京跡右京第1007次・^{しもかいじんじ}下海印寺遺跡 昨年度検出していた11世紀末～12世紀初頭の堀によって区画された建物跡群の東南隅と北部分の調査を実施し、堀の延長部と堀の内側の建物跡と土坑などを検出した。その結果、下海印寺遺跡の屋敷地は一辺約50mの堀で区画された敷地があり、南西の一面に南北4間(9.0m)、東西5間(10.0m)の中心建物が存在することが明らかとなった(平成23年1月22日現地説明会)。

長岡京市^{ながおききょう}長岡京跡右京第998次・^{ともおか}友岡遺跡 長岡京の条坊復元によると右京七条三坊一町域にあたり、縄文時代以降中世までの遺構・遺物を含む友岡遺跡として知られている。これまでの雇用能力開発機構京都センター内の調査では、今回の調査地の東側で体育館の建設に伴って、平成2年に発掘調査(右京第363次)を実施し、奈良時代の柱穴・溝・井戸、中世の焼土坑のほかトレンチ東端では谷状地形の一部を確認している。今回の調査では右京第363次調査のトレンチ東端と対になる谷地形を確認し、この谷地形の上面幅は25m、深さ1.5mであることが明らかとなった。谷地形SX01からは長岡京期の土師器・須恵器・土馬・銭貨のほか、中世の食器である土師器皿や瓦器椀、製鉄加工に関連した鉄くずなどが出土した(平成22年8月26日関係者説明会)。

長岡京市^{ながおききょう}長岡京跡右京第1016次・伊賀寺^{いがじ}遺跡 調査地は長岡京跡右京八条三坊十六町にあたり、これまでの周辺地域での調査では、縄文時代中期の石囲い炉を設置した竪穴式住居跡や縄文時代後期の火葬骨を埋納した伊賀寺遺跡に近接する地点にあたる。調査では飛鳥時代から奈良時代にかけての整地層を確認したものの、縄文時代の遺構は検出されず縄文時代の集落の広がりが見らなかつた(平成23年1月19日関係者説明会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター)。

長岡京市^{ながおききょう}長岡京跡右京第994次・井ノ内^{いのうち}遺跡 府道に関係した調査で、3か所のトレンチを設定して発掘調査を実施した。1トレンチは調査面積20㎡と小規模な調査であったが、弥生時代後期の溝、古墳時代後期の竪穴式住居跡3基が確認された。第2・3トレンチでは桁行3間以上、梁間2間の東西棟の建物のほか柵列などを検出した。これまでの調査で長岡京跡の東西道である西三坊大路の側溝が検出されており、今回検出した建物が推定長岡京期の路面部分に位置し、建物の南に近接して平安時代前期の大型の井戸が確認されていることから、今回みつかった建物と柵列も平安時代の時期が想定されている(平成22年8月26日関係者説明会)。

長岡京市^{ながおききょう}長岡京跡右京第996次・上里^{かみさと}遺跡 長岡京廃絶以後の平安時代前期頃の木杭などで護岸された水路を検出した。護岸の一部には2本の木杭で固定した木製槽を転用材として水口に使用されたとと思われる遺構も存在した。

向日市^{ながおききょう}長岡京跡左京第539次 長岡京跡の条坊復元では一条大路南側溝を含む左京二条二坊十六町域にあたる地点で、長さ25m、幅3m、深さ0.6mの一条大路南側溝(溝S D53901)を検出した。この溝は長岡京から平安京へ遷都した頃に埋め戻されていることが明らかとなった(平成23年3月5日現地説明会・(財)向日市埋蔵文化財センター)。

向日市^{ながおききょう}長岡宮跡第481次 大極殿の西約250mにあたる地点で、長岡宮の朝堂院西方官衙域の北西部にあたる。検出遺構には柱掘形21基と石組溝4条があり、回廊の北西隅を構成する遺構で、長岡京第一次内裏に関連する区画と考えられている(平成22年12月19日現地説明会・(財)向日市埋蔵文化財センター)。

京都市^{しょうじききゅうけいだい}勝持寺旧境内 「花の寺」として知られる勝持寺では、中世に49を数える子院が建ち並んでいる様子が絵図に記されているが、この地点が京都第二外環状道路路線帯にあたるため、発掘調査を実施したところ、鎌倉時代から室町時代にかけての石垣・石塁と造成された平坦面を検出した(平成23年3月26日現地説明会・(財)京都市埋蔵文化財研究所)。

〈北山城地域〉

京都市^{しょうこくじきゅうけいだい}相国寺旧境内 同志社大学の校地整備に伴う発掘調査で、足利義満の建立による相国寺の南西部の調査を実施し、室町時代の層から、幅10m、深さ1.4mの南北方向の直線水路を検出した。この水路では、両側の堤上面に道路の可能性のある小石を敷き詰めた礫敷き遺構も検出している。また水路上面には、15世紀後半から16世紀の大型建物跡を検出した(平成22年11月27日現地説明会・同志社大学)。

京都市^{ほっしょうじ}法勝寺跡 京都市岡崎にあり、院政期に白河天皇が建立した法勝寺の塔跡の発掘調査を実施し、塔礎石の南側5か所を検出した。今回の調査により塔は一辺が12.5m、東西幅32mであ

ることが明らかとなり、その状況から八角、九重の塔であることが判明した(平成22年6月24日現地説明会 (財)京都市埋蔵文化財研究所)。

京都市^{にしきょうこく}西京極遺跡 平成19年に発掘調査を実施した西京極遺跡の整理作業を進めている段階で、弥生時代後期の竪穴式住居跡の中央炉内から鉄の加工や鍛造の際にでる数mmの鉄片が含まれていることがわかった。同炉内にはガラス小玉・水晶片も出土しており、玉生産に際して鉄の加工をおこなっていることが判明した。

〈南山城地域〉

南山城地域では、古墳時代前期末の古墳と後期の古墳、古墳時代の集落遺跡、奈良時代の恭仁京に関連したと思われる遺構、近世の仏堂など多彩な遺跡の調査がおこなわれた。

八幡市^{いわしみずはちまんぐうこくじ}石清水八幡宮護国寺跡 護国寺は貞観2年に社殿が整い、本殿に次いで造られた山の中腹に建てられた仏堂(護国寺)である。護国寺の発掘調査では江戸時代前期と後期の建物跡を検出し、建物の柱列の内側に「輪宝」を置き、その中央に「独鈷杵」を突き立てて埋納した遺構がみついている(平成22年12月4日現地説明会 八幡市教育委員会)。

八幡市^{かきたに}柿谷古墳 一辺12mを測る方墳で、墳頂部で組合式木棺2基と甕棺墓1基を検出した。墓壇長4m、幅2mの第1埋葬施設では、6世紀後半の須恵器とともに鉄製馬具(轡)・鉄板金銅張胡籙・鉄剣・砥石などが出土した。この柿谷古墳では第1埋葬施設の下に古い時期の埋葬施設があり、さらに古墳築造以前の旧表土上で一辺6mを測る方形の周溝を検出した(平成22年12月23日現地説明会)。

綴喜郡精華町^{くろおかやま}鞍岡山3号墳 鞍岡山3号墳は直径約40mの円墳で、墳丘南側の斜面に石を敷き詰めた島状遺構を確認し、ここから家形埴輪2基分のほか、墳丘から船を線刻で描いた円筒埴輪が出土した。埴輪の特徴から4世紀末から5世紀初頭とみられる(平成22年5月22日現地説明会 精華町教育委員会)。

綴喜郡精華町^{むくのき}棕ノ木遺跡(第9次) 平成14年度の第6次調査では、平安時代から室町時代の掘立柱建物跡、古墳および弥生時代の溝を検出しているが、今回の第9次調査はその西側にあたり、掘立柱建物跡2棟と柵列、その南側で地境の小溝群を検出した。またその下層であらたに4基の円墳、弥生時代の溝を検出した(平成23年2月5日現地説明会)。

綴喜郡精華町^{かたやま}片山遺跡 平成21年度から継続して発掘調査を実施している遺跡で、今年度の第3次調査では方位を真北にもつ掘立柱建物跡(桁行3間、梁間2間)1棟のほか、溝・土坑などを検出した。

綴喜郡精華町^{げば}下馬遺跡 片山遺跡と同様、平成21年度から継続して発掘調査を実施している遺跡で、今年度の第3次調査では平安時代後期の素掘り井戸と中世の柱穴・溝を検出した。方位を真北にもつ掘立柱建物跡(桁行3間、梁間2間)1棟のほか、溝・土坑などを検出した(平成23年1月23日現地説明会)。

宇治市^{じょうみょうじ}浄妙寺跡 藤原氏一門の供養のために建立された浄妙寺跡で、本堂から西へ約30m離れた地点で、南側の長さ20m、幅1.5mにわたって築地塀跡を確認するとともにその西側で側溝

を検出した(平成22年4月17日現地説明会 宇治市教育委員会)。

木津川市^{つばい}椿井遺跡 椿井大塚山古墳の南約1kmの地点で、横穴式石室を埋葬施設とする古墳2基を新たに検出した。古墳は直径16mの古墳1と直径13mの古墳2で、いずれも6世紀前半の円墳で刀子・鉄鏃・碧玉製管玉のほか、須恵器・土師器が出土した(平成22年11月21日現地説明会)。

木津川市^{かみこまきた}上狛北遺跡 昨年度に引き続き調査で、奈良時代の総長100mの真北の直線溝とその西側で掘立柱建物跡3と掘立柱建物跡2の間で、その下層に奈良時代の土器・瓦・木簡を含む土坑、さらに古墳時代後期の竪穴式住居跡などを検出した。直線溝および掘立柱建物跡、下層の土坑は恭仁京城部分にあたり、今後恭仁京を考えるうえでの遺構・遺物を検出した(平成23年1月23日現地説明会)。

木津川市^{ばばみなみ}馬場南遺跡(第5次) 平成20年度の調査で検出した礎石建物跡(仏殿)の西側丘陵部で3個の礎石と2か所の礎石据え付け痕を確認し、塔跡を検出した。塔跡は4本の柱で屋根を支える一間(6尺=約1.8m)四面の特異な構造の塔であることが明らかとなった(平成23年2月19日現地説明会・木津川市教育委員会)。

以上のように、今年度も数多くの発掘調査成果が得られた。これら発掘調査とともに、平成22年(2010年)は、平城遷都1300年を記念して数多くの講演会、記念事業が京都府内でも実施された。当調査研究センターでも「天平浪漫紀行・京都」と題して、展覧会を平成22年8月14日から同年9月20日の32日間実施し、その間の平成22年9月4日には上田正昭当調査研究センター理事長による記念講演「聖武天皇と天平文化」、京都府立大学菱田哲郎教授による基調報告「天平の寺とものづくり」を実施し、平成21年度の調査で注目された木津川市馬場南遺跡・奈良山瓦窯群について検討がおこなわれた。また、京都府立山城郷土資料館では特別展「平城の北・恭仁宮－木津川流域の奈良時代－」が開催され、11月6日には講演会として「恭仁宮発掘調査のあゆみ」(森正)、「奈良山瓦窯群の瓦生産」(森島康雄)、「平城京を飾った瓦」(奥村茂樹)の各講演があった。恭仁宮天平祭記念シンポジウム「今造る久爾の都は」として、11月20日に講演「天平の意匠と服装」(田中陽子)、「恭仁宮と日本の都城」(中尾芳治)など注目される講演会が実施され、平城遷都1300年記念事業が開催された。

当埋文センターが実施しました調査成果の一部が現地説明会資料としてホームページに掲載しておりますので、詳しく知りたい方はホームページをご参照ください。

(いしい・せいじ＝当調査研究センター調査第2課主幹)

恭仁京造営史（上）

伊野近富

1. はじめに

恭仁京は天平12(740)年12月に突然遷都が宣言された都である。天平17年5月には廢都のための清掃がされており、短命な都城であった。恭仁宮については、主に京都府教育委員会による発掘調査で、その宮域が確定した。それによれば平城宮の約3分の1の面積であり、このことから本格的な都城ではなかったとする見解が多い。

本稿は異例の都城であった恭仁宮・京の造営の歴史を辿り、実は2つの宮をもつ、すなわち双宮の都城であった可能性を指摘するものである。

2. 造営前史

まず、恭仁宮造営にいたる歴史を辿りたい。天平10(738)年は恭仁京遷都にとって重要な年であった。まず、正月に阿倍内親王(後の孝謙天皇)が皇太子となった^(注1)。聖武天皇の治世が安定し、王権の継承が確定したのである。5月24日には、右大臣諸兄、神祇伯中臣名代、右少弁紀宇美、陰陽頭高麦太を派遣し、神宝を持参して伊勢大神宮に奉らせた。何のための神宝奉納なのか『続日本紀』に書かれていないが、わたしは、恭仁郷の地勢を述べて遷都すべきかどうかの判断を神に委ねたのではないかと想像している。後年の記事であるが、長岡京遷都のとき、長岡京予定地を視察したのは中納言、神祇伯、左大弁、陰陽助というメンバーであり、今回と通じるのである。

翌天平11(739)年3月21日に、対馬から神馬が献上されが、馬の色は、大瑞に相当するものであると奏上してきた。この吉事のなか3月2日と3月23日に、天皇は甕原(みかのほら)離宮に行幸した。この離宮は、翌年遷都される恭仁宮の地を東に望め、西は木津川と泉津などの向こうに南山城の平野が望める^(注2)ところでもある。

その後、聖武天皇は5月10日に右大臣橘諸兄の相樂別業に行幸した。行幸は3日間に及んだ。通例より長く、ここで遷都実行の提案をしたのではないか。行幸場所は南山城の地であり、諸兄の勢力範囲であった。天皇は頻繁に将来の恭仁宮や恭仁京が見える地に赴いている。

このように、遷都への兆候が窺われるなかでの8月29日、大宰府少弐であった藤原広嗣は表を奉った。それによれば僧正の玄昉と右衛士督従五位上の下道(吉備)真備を追放すべしと言うのである。そして、9月3日に藤原広嗣は乱を起こした。しかし、聖武天皇はこのような緊急事態ではあるが、10月19日には伊勢国の行宮を造る司を任命し、10月23日には行幸の次第司を任命した。10月26日には大將軍大野東人に勅して「思うところがあって今月の末より暫くの間、関東に行こうと思う。行幸に適した時期ではないが、事態が重大でやむを得ないことである」といい、巡幸することを宣言したのである。幸いにも、乱は途中で終息し、一行は狩をしたり、歌会を催した

りと、のどかな行幸となった。

12月6日には近江国坂田郡横川に向かった行幸の集団とは別に、諸兄は先発した。山背国相楽郡恭仁郷の地を整備し、遷都の準備をするためと説明されているが、このことについては後述する。12月14日に天皇一行は山背国相楽郡玉井頓宮に到着した。そして、12月15日に天皇は恭仁宮に行幸し、ここを都とすると宣言した。

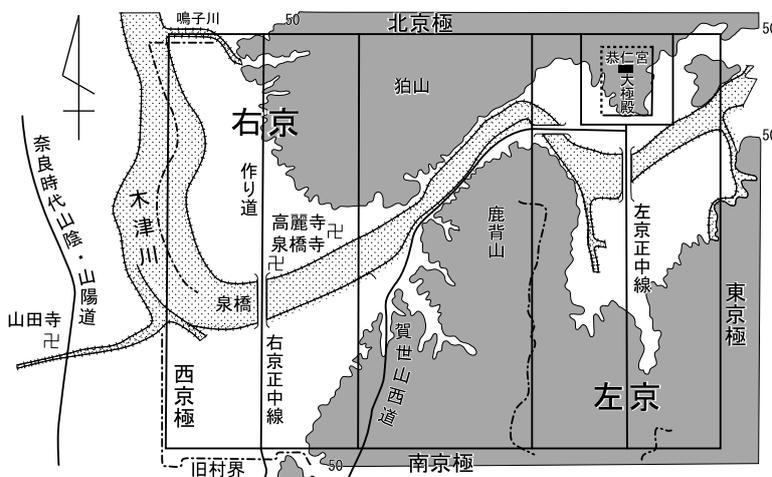
3. 先行研究

ここで、恭仁京研究を振り返って見よう。恭仁京研究史にとって画期的だったのは、足利健亮氏の復原案が世に出されたことである。足利氏は、天平18年9月29日にある「恭仁宮の大極殿を国分寺に施入する」という記事をもとに旧恭仁小学校北側の土壇を大極殿と考え、ここを中心に平城宮相当の約1km四方の宮域を想定した。さらに、天平13年9月12日に「賀世山西道より以東を左京、以西を右京とする」という記事があるので、賀世山西道を想定して、左右京を分離した復原案を考案した。これをもとに、京都府教育委員会は昭和49年から宮域の発掘調査を実施することとなった。調査が進展するにつれて、恭仁宮は平城宮の約3分の1の面積しかないことが判明した。

これに対して伊野は、375大尺で施工された平城京が、720年ごろに小尺で施工された道路があることを明らかにした井上和人氏の研究成果を援用し、恭仁宮は375小尺で施工されたとの恭仁京復原案を提示した。

網伸也氏は、恭仁宮は地形的制約を受けながら大極殿の南北中軸線を基準線として開放的に造営されたと考えている。また、遷都までに急がれた内裏造営とは方位を異にしていることから、宮域施設の全体プランの設計は遷都後に行われたと考えている。また、京域についても非常にあいまいな形で範囲が設定されたとしている。

文献史料から鎌田元一氏は恭仁宮造営について検討した。これによれば恭仁宮はまず、(元正)太上天皇を迎えるための新宮(新たに完成した恭仁宮内の内裏殿舎を意味している)の造営を急



第1図 足利健亮氏による恭仁京復元図

(キャプションとも『景観から歴史を読む』1988より転載)

ぎ、これが天平13年7月初頭頃に完成し、その後、大宮垣や大極殿の造営に移ったとした。天平14年正月には大安殿が完成し、天平15年正月までには大極殿が完成し、同年12月には朝堂が完成していたと推定した。この文献の整理により、造営の段階が確認できた。

恭仁京に伴う溝である可能性が高い。

5. 宮と京の造営

a) 恭仁宮の面積 恭仁宮の施設を詳細に見てみると、朝堂院の南東部や宮大垣の東辺、内裏西地区などで北に対して西に2度振れているものが多いが、西に5度、あるいは東に5度程度振れた方位で施工された箇所もある。他の部分は真東西や真南北なのである。これは、都城を造営する集団が少なくとも2つ以上あることを示している。すなわち、高い精度をもつ集団と、そうでない集団である。このことについては後述することとし、ここでは、区画された面積がどういう意味があるのかを考えたい。

発掘調査で確認された宮域は、南北750m、東西560mであるので、南北2533.7尺(1尺=29.6cmで計算)、東西1891尺である。この面積は4793253.66平方尺であり、1坪(375.375尺=140625平方尺)の面積で除すと、34.08坪となる。すなわち、34坪で設計されたと考えられる。また、内裏西地区は南北432.4尺(128m)、東西331尺(98m)であるので、142992平方尺となる。これを1坪の面積で除すと1.01坪となる。したがって、内裏西地区は1坪であると考えていいだろう。内裏東地区は南北469.5尺(139m)、東西368.2尺(109m)なので、面積は1.23坪となる。これは、内裏西地区にそれぞれ375尺の10分の1を足した長さに設計されたと考えられる。内裏東地区の内部には四面廂の大型建物(S B5501)があり、ここが天皇の居住空間であって、大極殿が完成するまでは、執務空間でもあったと想像する。したがって、1坪を越える空間が必要であったのである。

このように分析してみると、恭仁宮は375尺方格を強く意識した宮域であったことがわかる。ということは、面積が平城宮の3分の1しかないということは問題である。執務空間が足りないのである。平城宮が64坪(東院を除く。ただし、平城宮は450尺方格)なので、あと30坪は必要なのである。なお、恭仁京に遷都する前の平城宮の朝堂院施設は2つあり、これを簡便な1つだけの施設にすれば、3分の1軽減されるが、それでも、恭仁宮の執務空間は、現在知られている2倍の面積は必要なのである。平城宮以降の長岡宮や平安宮は北部に据えられるものであった。今、左京にある宮を左(東)宮とすると、右京にも同様の宮があったと想定すれば、右(西)宮が想定できるのである。すなわち、恭仁京は左右(東西)の2宮と左右京の2京で設定された都であった可能性がある。

鎌田氏の検討により、宮や京造営に段階が認められることが判明した。ここからは、2宮2京の観点から造成の段階を考えたい。わたしは、宮は4段階、京は3段階あったと考える。

b) 宮の段階

第1段階 天平12年12月6日前後から天平13年7月初頭である。内裏空間の一部、(元正)太上天皇を迎える施設が完成した時期までである。恭仁宮大極殿を中心に、恭仁宮周辺の地形を見てみよう。北と東西を山に囲まれ、南は木津川が貫流するという、唐の洛陽に似た風景である。大きく見れば北が高く、南が低いのだが、微視的に見れば北西が高く、南東に下がった地形の中心に大極殿は位置している。現地に立ってみると方形の段が各所に認められる。中世に改変された

場所もあろうが、古代に人工的に造られたか所も多いと判断されるが、これは、地形の高い部分を削って、地形の低い南東部へ運び、埋めたものであろう。すなわち、宮域の建物を建築するために、まず、平坦面を作る土木作業が必要だったのである。大極殿の場所も前面には1mほど盛り土されている。

ここで、恭仁宮造営初期の状況を考えて見よう。おそらく、天平12年の冬至の日(11月25日)に算師などの測量士が大極殿を通る南北軸を仮決定し、大垣の四至、朝堂院なども杭などで四隅を明示したと考えられる。^(注11)古代の都城の軸線は冬至の日に設定されるのが通例であった。そして、12月6日以降一兩日で現地に着した諸兄によって南北軸は決定された。この軸は海住山寺のある地点から大極殿を通るので、造営者が中心ラインがわかるように山に柱か塔を建てたかもしれない。この場合、『万葉集』にみえる布当山を「フト山」と読めば、不図(塔)に通じる。

7月10日に「(元正)太上天皇が新宮に遷る。天皇は河頭に迎える」とある。太上天皇は前年12月15日から玉井頓宮に留まっていたのだが(鎌田元一氏は甕原離宮にいたとする)、施設が出来上がったため、この日恭仁宮に入ったのである。この月には鹿背(賀世)山の東の河に橋を作り始めており、仮設の橋を通ったのかもしれない。

第2段階 天平13年7月から天平14年8月までで、宮大垣完成までとする。この時期に大安殿が完成している。鎌田氏はこの期の初めから大極殿や宮大垣を建築したと考えられているが、わたしは、平城宮の建物を解体したものを、恭仁宮に運んだのだが、大極殿は中心建物であり、この作業に半年以上費やしたのではなく、解体と運搬と建築は連続的に行われたと考えるので、第1段階から開始されたと考える。ただし、整地にある程度時間がかかったことは想像できる。

天平13年9月8日に智努王と巨勢奈豆麻呂の二人を造宮卿とし、体制を強化し、9月9日には宮造営のため大養徳、河内、摂津、山背から役夫5500人が徴発された。多くの役夫は、広範囲を整地するため、徴発されたと考える。

天平14年1月16日には大安殿に群臣を集めて宴が開かれた。ここで酒が振舞われ、五節田舞などが行われたが、宴が終って、大宮に入る百姓20人に爵1級を、都内に入るものは男女を問わず物を賜った。造営が始まって1年以上が過ぎており、あまりにも遅いのではないか。平城遷都の場合は、遷都前にこのような下賜は実施されている。この記事は右(西)宮や右京の中に入った人への下賜の記録である可能性がある。

天平14年8月5日には詔があって、造宮録(さかん)正八位下の秦下嶋麻呂が従四位下を授けられた。太秦の姓も賜った。恭仁の大宮垣を築造したからであるという。通常1階づつ上がるのに、異例の昇進である。これは、大規模な築造の関与があったためといえよう。すなわち、宮大垣以外に朝堂院の外郭も造営したからと考える。それぞれの東南部の方位はN5°Wであり、これは同じ造営者であった可能性が高い。造宮録とはいえ、秦氏は自分たちの方位観で造営したのである。秦氏の本拠地である京都市太秦で確認される方格地割りは北西に斜行している。^(注12)

さて、二条以北には重要官人の邸宅があったことは想像に難くない。断定はできないけれど、東宮の西南隅で出土した墨書土器に「東宅」「東殿」と読めるものがある。^(注13)重要官人の邸宅が宮

域のすぐ近くにあったことを示しているのであろう。しかし、出土位置は宮の西であり、「東宅」「東殿」は不自然である。これは、東宮あるいは東側である左京にあった建物を示していると考えたほうが良い。とすれば、西宮が存在し、その周辺の建物には「西宅」「西殿」と呼ばれた建物があった可能性がある。ともあれ、8月頃には東宮の外観は整ったといえよう。

第3段階 天平14年8月から12月までで、大極殿完成までとする。大垣という外郭が整い、内部の施設を集中的に建築した段階である。天平14年8月11日に、聖武天皇は「近江国紫香楽村に行幸しようと思う」と宣言した。このため造離宮司が任命されたのだが、造宮卿智努王や造宮輔高岡(丘)連河内ら4人であった。すなわち、恭仁宮を造営する責任者の半分が、紫香楽村に離宮を造るために派遣されたのである。このことから大極殿造営は最終段階を迎えていたのではないか。天平15年1月3日には恭仁宮大極殿で朝賀を受けるので、大極殿は天平14年末までには完成したのである。

第4段階 天平14年末から同15年末までで、朝堂完成までとする。天平15年12月26日に「平城の大極殿ならびに歩廊を壊して恭仁京に遷し造ること四年、その功わずかにおわり、用度の所計るべきもない。ここに至って更に柴香楽宮を造るので、恭仁京の造作を停める」とあり、この頃には恭仁宮の外観も内の施設をもほぼ完成したことがわかる。(以下、次号)

(いの・ちかとみ=当調査研究センター調査第2課次席総括調査員)

- 注1 『続日本紀』。特に断っていない記事はすべてこの書による。現代語訳は、宇治谷孟『続日本紀』(上・中・下)講談社学術文庫 1992
- 注2 中谷雅治「甕原離宮の位置について」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注3 足利健亮『日本古代地理研究』大明堂 1985
- 注4 井上和人「古代都城制地割再考」(『研究論集』奈良文化財研究所) 1985
- 注5 伊野近富「恭仁宮・恭仁京復原案の副案」(『京都考古』第65号) 1991
- 注6 網伸也「古代都城における二つの形態」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第134集) 2007
- 注7 鎌田元一「文献史料からみた恭仁宮」(『律令国家史の研究』塙書房) 2008
- 注8 昭和49年から京都府教育委員会によって発掘調査されている。調査結果は各年度の概要報告と2冊の報告書で公表されている。さらに、加茂町教育委員会の成果もある。
- 注9 奈良康正「恭仁宮大極殿院考」(『京都府埋蔵文化財論集』第6集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010 なお、近年の発掘調査によれば、大極殿院の大きさが変更される可能性がある。
- 注10 「上狛北遺跡」現地説明会資料 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2011
- 注11 伊野近富「長岡京造営考」(『明日へつなぐ道-高橋美久二先生追悼文集』京都考古刊行会) 2007
- 注12 岸俊男「班田図と条里制」(『日本古代籍帳の研究』塙書房) 1973
- 注13 森正「恭仁宮跡平成11年度保存活用調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』2000) 京都府教育委員会 2000

人面付き土器の系譜（上）

－温江遺跡出土の人面付き土器を巡って－

岩松 保

平成20年11月から平成21年1月にかけて、与謝郡与謝野町(旧加悦町)温江遺跡での発掘調査を行った。その調査において、弥生時代前期の環溝と判断される大溝内から多量の弥生土器に混じって、人面付き土器が出土した。頭頂部の「鶏冠」状の突起が印象的で、「ウルトラマン」や「ビリケン」を彷彿させるものであった。

1. 人面付き土器の観察と問題点

温江遺跡出土の人面付き土器は、頭部だけが完存しており、首より下は欠損している(写真1～6)。大溝内から土器片が多数出土したが、人面付き土器に接合するものはなかった。この人面付き土器は残存高8.5cm、顔の長さ9.15cm、顔幅5.6cm、奥行き7.1cmを測る。色調は淡茶褐色で、焼成は良好である。与謝野町教育委員会の埋蔵文化財担当の方にお訊きしたところ、この土製品の胎土や色調・焼成は、与謝野町内で焼かれたと考えてもおかしくはない、とのことである。

人面付き土器の内部は中空で、土器と同じく、内面に粘土紐を横方向に積み上げた痕跡が認められる。人面の表面は丁寧にナデて作られている。頸の部分はほぼ平らに割れた破断面となっており、径約6cmの円形をなす(写真6)。この部位で土器と接合していたと推定される。

鼻・耳及び頭頂部から後頭部にかけての縦方向の突起は粘土を貼り付けて作られている。鼻は下方から2つの穴が穿たれているが、貫通はしていない。目や口はヘラ状工具の線刻や刺突で表現されている。

鼻の穴や眼、口は人間の顔と同じ位置に表現されているが、両耳には耳たぶの位置に小さな孔が貫通しているだけである(写真2・3)。いわゆる耳の穴－外耳道は表現されていない。

人の顔を正面から見ると、耳の中央に外耳道につながるくぼみが認められるので、人面付き土器



写真1 温江遺跡出土の人面付き土器（斜め上）



写真2 温江遺跡出土の人面付き土器（正面）



写真3 温江遺跡出土の人面付き土器（背面）

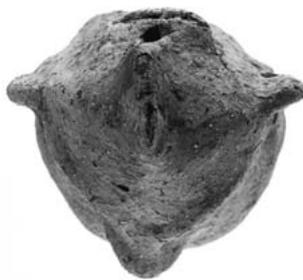


写真4 温江遺跡出土の人面付き土器（上面）



写真5 温江遺跡出土の人面付き土器（右側面）



写真6 温江遺跡出土の人面付き土器（底面）

の耳の小孔はこのくぼみを表現したとも考えられるが、孔が貫通していることや耳たぶのやや下方にある点で納得し難い。そのため、「ピアスの孔」を表現していると考えるのが妥当であろう。この場合、目や口・鼻の穴は人のそれと同じ位置に、線刻もしくは穴で表現されているのに、なぜ外耳道の穴だけが表現されていないのかは、不明である。

頭頂部の縦方向の突起は、額から始まり、後頭部の上半部で終わっている。額から突起への移行は直線的で、その境に段は認められない(写真5)。そのため横から見ると、「髻」と言うよりも頭頂部が上方に引き延ばされたように見える。この突起の上辺は、ややすり切れており(写真4)、「使用」に伴った痕跡であろうか。突起は後頭部ではほぼ垂直に終わっており、平坦な後頭部には楕円形の突起が貼り付けられている(写真3～5)。この突起の上には、ヘラで横方向の線刻一条がなされており、上・下には垂直方向に孔が空けられている(写真3・4)。現状では孔の内部に白色の砂粒が詰まっているが(写真6)、上・下の孔が直線上にあることから、縦方向に貫通していると判断される。

人面付き土器の表面には、額と顎に朱色に発色した斑点、頭頂部の突起の両側と根本部分に赤黒い発色が認められた。これらの部位を理化学分析したところ、ともに、発色していない部分よりも鉄分が多く含まれており、そのために発色していることがわかった。額と顎の部分は、鉄分の含有量が自然の中で偏在する範囲の中にあっただが、頭頂部の突起付近のものは鉄分の含有量が非常に多く、人為的に赤色顔料(ベンガラ)を塗布した可能性が高いことが判明した。大阪府東奈良遺跡出土の人面付き土器(第1図3)では、朱・漆が塗布されている(網点部分)。温江遺跡の人面付き土器も部分的もしくは全体に赤く彩色されていたものと

推測される。

西日本における人面付き土器の出土例は、弥生時代前期を中心に10例未満と少なく、いずれも首より下が欠損しているため、どのように土器を飾っていたのか、何に用いられたのか、はよく分かっていない。東日本の例では、壺の頸部の上に頭部が付いているものがある。島根県西川津遺跡出土の人面付き土器は、スカート状に広がる肩部を有していることから、蓋の把手部分に付けられていたと想定されている(第1図1)。温江遺跡の事例は、頸の部分ではほぼ水平に割れていることから、土器の頸部に取り付けられていたのであろうか。

2. 人面付き土器は何を表現したものか

温江遺跡出土の人面付き土器は、人の頭部を写實的・立体的に表現している。造形上で特に目を引くのが、頭頂部から後頭部にかけて縦方向に作られた突起である。西日本で出土する人面付き土器には、温江遺跡と同じく、頭頂部に縦方向の突起——「鶏冠」もしくは「髻」状の突起が付けられているものが多い(第1図1～3)。また、板に線刻で描かれた絵画にも、頭頂部の突起が表現されているものがある(第1図5)。人面付き土器を理解する上でまず問題なのは、この頭頂部の突起は何を表現したものなのか、という点である。

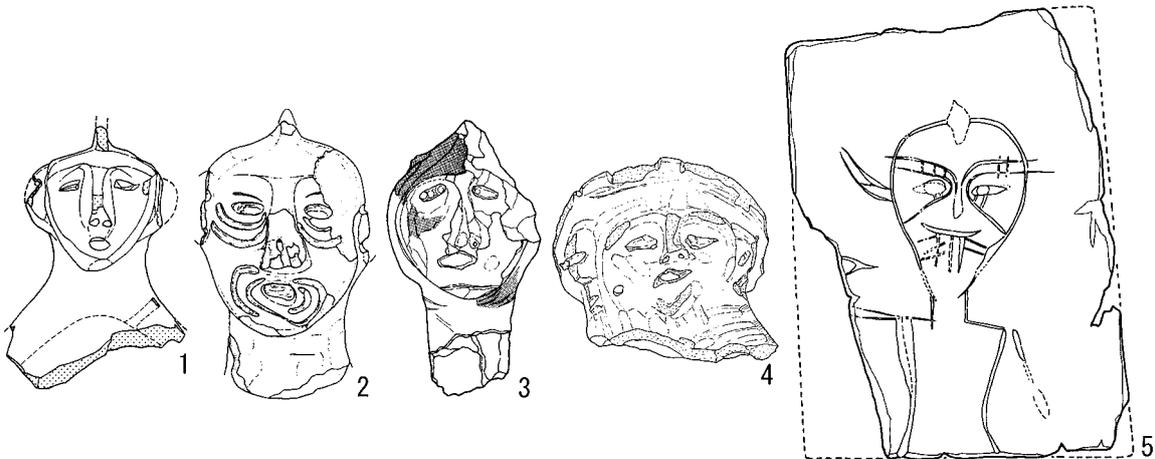
その解釈を整理して掲げると、

①当時の髪形風俗を写實的に表現した

- a. 特殊な状況の髪形を表現した場合
- b. 通常の髪形を表現した場合

②髪形風俗を表現していない——ある概念的なイメージを具象化して表現した

とまとめられる。①aは、ある特殊な人々の髪形を真似たという考えであり、具体的には、頭頂部の突起は「鳥の鶏冠」と捉え、鳥装をした司祭者を表現したというものである。①bは、一般的な人々の髪形が表現されているという考えである。温江遺跡出土の人面付き土器では、頭頂



第1図 鶏冠もしくは髻状の表現を持つ造形物（縮尺不同）

- 1. 島根県西川津遺跡
- 2. 香川県鴨田・川田遺跡
- 3. 大阪府東奈良遺跡
- 4. 大阪府目垣遺跡
- 5. 福岡県上籬子遺跡

部の突起と後頭部の突起・穿孔が認められるが、これは髪を頭頂部よりやや額寄りで束ねて後方に折り曲げ、髪先を後頭部で櫛と棒状のヘアピンで留めた表現とも解釈できる。それに対して、②は例えば、「精霊」や「鬼」といった概念的なものに形を与えたと考えるものである。

これらの解釈の可能性について、以下、検討していきたい。

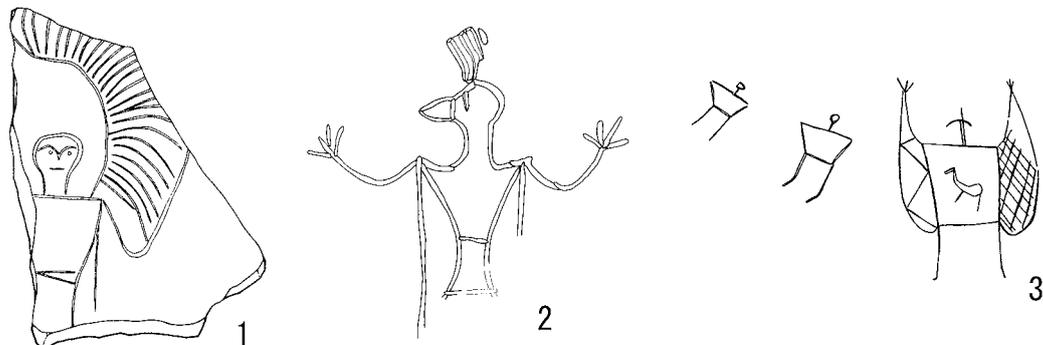
3. 人面付き土器は鳥を表現したものか

弥生時代の鳥装の司祭を写したと推定される絵画が、奈良県坪井遺跡(第2図1：中期後葉)や同清水風遺跡(第2図3：中期後半)、岡山県新庄尾上遺跡(第2図2：中期後葉)で出土している。坪井遺跡のものは、頭部から胴部が描かれており、左肩から頭部にかけては羽状の翼の表現がなされている。左肩より下方向に描かれた線はその位置から、腕の表現とされている。新庄尾上遺跡のものは、頭部にくちばし、頭頂部に「羽毛等で作られたとさか状の頭飾り」があり(斎藤1986、p.125)、指は4本、腕の下には翼状のマントが表現されている。鳥を模した「被り物」もしくは「頭飾りとくちばし状の仮面」をつけたかのようである。奈良県清水風遺跡出土土器には、簡略な表現ながらも、頭には被り物を、腕の下には翼をつけ、指が3本の鳥装の司祭が描かれている。

弥生時代の鳥の造形物としては、前期のムラの周囲に飾られた鳥形木製品があり、最古段階(前期)の袈裟襴文銅鐸である福井県井向2号銅鐸には、様々な画材の中に「サギ」と判断される鳥が描かれている。

このように「鳥装の司祭」や鳥を造形した事例があることから、弥生人は鳥に対して特別なイメージを有していたことが窺われる。鳥は大空を舞い、山の彼方を自由に行き来することから、山の向こうにある「未知の世界」と「この世」とを繋ぐ存在と認識されていたのであろう。

『古事記』では、^{やまとたけるのみこと}倭建命の魂が「^{やひろしるちどり}八尋白智鳥」になって三重県能煩野から河内国志幾に還り来たと記されている。亡き人の魂が鳥になって行き来すると認識されていたようだ。また、高天原から葦原中国に使わされた^{あめのわかひこ}天若日子と連絡するために使われたのは「雉」であった。^{あめのわかひこ}天若日子が亡くなり殯の席では「^{かわがり}河雁を^{きさりもち}岐佐理持とし、^{ははきもち}鷲を掃持とし、^{そにどり}翠鳥を御食人とし、^{みけびと}雀を^{うすめ}確女とし、^{なきめ}雉を哭女とし」とあるように、亡き人の魂を慰撫しあの世へ送るために鳥を仕えさせ



第2図 鳥装の司祭 (縮尺不同)

1. 奈良県坪井遺跡 2. 岡山県新庄尾上遺跡 3. 奈良県清水風遺跡

ている。古代においては、鳥は未知の世界と現世とを行き来できると考えられていたのであろう。

鳥は未知の世界とこの世の間を行き来できるため、未知の世界に現世にいる人々の願いを届ける存在であると認識されていたのであろう。そのため、人間が鳥を装うことで未知の世界と交信し、秋の稔りを確かなものとしたり、未来の様々な出来事をより良いものにしようと企図したのであろう。この想定の当否は別にして、弥生時代の造形物に鳥の表現が多数認められることから、鳥が祭祀に係わっていたことは間違いなく、絵画表現にあるように、弥生の村々では鳥装の司祭が儀式を執り行っていたことは間違いなかろう。

しかし、弥生時代の造形物に鳥に係わる表現が多数あるからと言って、そもそも、ここで問題にしている人面付き土器などの頭頂部に表現された突起を「鶏冠」と判断してよいのであろうか。

鶏冠のある鳥として思い浮かぶのは、鶏であろう。日本列島における弥生時代の鶏の出土例は、弥生時代中期では福井県吉胡遺跡の鳥形土製品があり、後期には奈良県唐古・鍵遺跡の鶏形土製品がある。これらの事例は、「鶏のように見える」というものであり、確かなものではない。確かな事例としては、鶏の骨が後期の段階に愛知県朝日遺跡で出土している（西本1993）。

列島における鶏の出現時期は、土製品を含めて見ても、現時点では人面付き土器が西日本で盛行する前期に遡る例は確認されていない。そのため、「人面付き土器の鬚状の突起は鶏の鶏冠を模した」という考えは、人面付き土器と鶏が出現する時期に隔たりがあり、成り立ち難い。

そしてそもそも、鶏は空を自由に飛ぶことができないため、「空の彼方への憧憬」といった感情が鶏から喚起されない点も問題である。

とは言っても、(水)鳥に係わる農耕祭祀が中期以降に存在したことや、そういった祭祀が前期にさかのぼる可能性を否定するものではない。先述のように、中期以降に司祭を表現したと考えられる絵画が存在することや、前期の銅鐸にサギが画材として採られていることから、前・中期にも(水)鳥にまつわる農耕祭祀が行われたことは間違いのないであろう。

ここでは、(水)鳥にまつわる祭祀が執り行われた所以と人面付き土器が作られた所以とは全く異なることを確認しておきたい。

一方、可能性としては、人面付き土器の頭頂部の突起は、クマタカやヒバリなどの頭部にある冠羽を表現したと解釈することもできよう。この解釈では、人面付き土器の出現時期を考慮する必要はない。しかし、これらの鳥自体がさほど大きなものではなく、あまり人の眼に触れる鳥ではないこと、冠羽自体がその鳥を象徴するような特徴的なものではないこと、山や野に棲んでいて田畑で常に眼にするものではなく、農耕祭祀と結びつく存在でもない点で、納得しがたいものである。

以上のことから、人面付き土器の頭頂部の突起は鶏冠や冠羽とは考えられず、人面付き土器は鳥装の司祭を表現したとは言えないのである。そうすると、次の可能性として、当時の髪形風俗を写したという解釈を俎上に上げて検討したい。

4. 人面付き土器は髪形風俗を表現したもの

1) 髪形表現の類型

『魏志倭人伝』によると、倭人の髪形風俗は、「男子皆露紒、以木綿頭招」「婦人被髮屈紒」と記されている。「男子は皆露紒し、木綿を以って頭に招け」、「婦人は被髮屈紒し」と読まれる。「紒」とは「カイ・ケイ」と読み、「髪をむすぶ、結う」ことである。しかし、この文の詳細な意味はよくわかっていない。

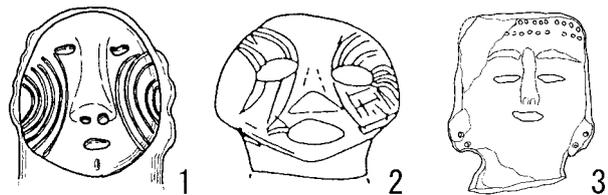
先学の研究をまとめると、男子は「美豆良」とも「髻」とも解釈されている。「露紒」は「冠をかぶらずに露わになっている状態」でほぼ一致しており、「以木綿頭招」は「木綿を頭に巻いた状態」もしくは「掛けた状態」と考えが分かれている。婦人は、「被髮」は「髪を被る」、「髪を結ばずにたらす」、「屈紒」は「髪をまげ結ぶ」と解釈されているが、「被髮」と「屈紒」が一人の頭の形状なのか、二人の頭の形状を指しているのか、よく分かっていない。

喜田貞吉は「紒」を美豆良と捉えず、「木綿を以て露紒の頭を纏ふ」と解釈し、紒のあり方はよく分からないとしながらも、男子は無帽の紒の上を布でまとっていたと考えた(喜田1917)。高橋健自は、「結髪した部分を露出しながら布で以て頭を掲げるといふ所作は美豆良の場合に出来る」と考え、男子は美豆良、「被髮は現代のハイカラ語でいへばオールバックであるが、紒を屈するとあるからには唯後へ垂れたばかりではなく、無雑作に束ねたのであろう」と、婦人はいわゆる古墳島田と考えている(高橋1927)。

井上光貞は、男子は「みな髪を結っているが、冠や帽子は用いず、木綿で頭をしぼっている」と解釈し、『北支』の記事と埴輪男子像を基に、美豆良と推測しており、婦人は「髪を編むことなく、うしろへ垂らし、その末を、頭の頂きでかがめつらねる」と解釈し、「つぶし島田」の前段階と考えている(井上1973、pp.219~220)。このほかにも、男は「木綿で頭をしぼって髻をつくる」、「女子は、ざんばら髪で(その一部をたばねて)まがった髻を結い(?)」(小南2003)、「男は美豆良の結髪で無帽、女は髪を後へ撫でて束ね曲げた形」(小川1986)、「倭の男は木綿(ゆう)を頭に巻き」、「女は、お下げや髻を結い」(佐原1987)、「男子は結髪をし、なにかぶらずに露出しており、なにかしら繊維の幅細いもので髪を括っていた」、「女子は『被髮』髪を結わずに自然のままにしているのと、『屈紒』髪を結っているものがある」(石上1999)など、諸説がある。当時の髪形風俗は史料からおぼろげにはわかるのであるが、細かな点はよくわからないのが実状である。^(註1)

人面付き土器の頭部の形状が当時の髪形風俗を示しているとするならば、西日本出土の人面付き土器の髪形は、以下のように分類することができる。

- ①鶏冠状の突起があるもの(写真1、第1図1~3)
- ②横方向に円盤状の廂があるもの(第1図4)
- ③短髪のもの(第3図1)



第3図 頭髪の表現(縮尺不同)

- 1. 山口県綾羅木郷遺跡(前期)
- 2. 岡山県津寺遺跡(後期)
- 3. 大阪府新免遺跡(後期)

④坊主タイプのもの(第3図2)

⑤美豆良状のもの(第3図2)

と分類することができる。②と③、もしくは③と④は、表現がデフォルメされているだけで、同じタイプと捉えることも可能であろう。

一方、東日本出土の人面付き土器を見ると、上記のものに加えて次のものがある。

⑥後頭部で結髪したもの

が認められる。

このように、人面付き土器の頭部の表現は数種類に分類が可能であり、類型化できるという点で当時の髪形風俗を表している可能性は否定できない。

2) 髪形風俗説の問題点1

しかし、温江遺跡出土の人面付き土器の頭部を元に検討すると、一概に当時の髪形風俗を表しているとは言えない状況が認められる。

後頭部には楕円形の突起が表現されている。これを櫛とするならば、髪の毛を頭頂部のやや前寄りから束ねて、後方に折り返し、髪の毛の先端を後頭部でまとめて、櫛を挿して押さえ、さらに、ヘアピン(かんざし)を縦に挿したと理解できる。

しかし、後頭部の表現を櫛と解釈してよいのであろうか。

第一に、横櫛が出土するのは古墳時代以降であり、弥生時代代ものは縦櫛である。

第二に、顔の正面側は写実的に作られているのに対して、後頭部の表現はさほど写実的でない。後頭部は後ろに張り出しておらず、櫛状の突起がなければ、ほぼ直に作られて扁平である。それゆえ、後頭部は顔面と較べてデフォルメされていると解釈できるが、そういった状況の中で、「櫛」だけが写実的に表現されていると解釈することは納得できない。

第三に、温江遺跡の人面付き土器だけが後頭部に櫛を表現している点も納得しがたい。他の遺跡から出土した人面付き土器も同様の髪形をしているのだから、温江遺跡のものと同様後頭部を櫛で留める表現がなされるはずであるが、そうっていない。後頭部の髪を櫛で留める場合と留めない場合があったのであろうか。その場合、同じ髪形になり得たのであろうか。

3) 髪形風俗説の問題点2

そしてそもそも、人面付き土器に表現された頭頂部の突起を真似て、実際に髪形を作ること自体が難しいのである。

現役美容師の方に、温江遺跡等の人面付き土器に見られるような「鶏冠」状の髪形が作れるかどうかをお尋ねした。泥や油などの整髪料で髪を固めたり、頭頂部以外の髪を剃ったり、ピン留めで髪に折り目を付けたりすると、人面付き土器に表現された「髪形」を作るとは可能であるとのお答えをいただいた。しかし、①髪形を固める油や泥を用いないこと、②頭髪を剃らないこと、③弥生時代にあったアイテムを用いる——ピン留めを用いないこと、と条件を付けてお訊きすると、結論的には「難しい」というお答えであった。

まず、頭頂部の「鶏冠」状の突起は、断面を見ると人面付き土器では上に突がった三角形を呈



写真7 撚りを付けた「鶏冠」状突起



写真8 撚りを髪で隠した「鶏冠」状突起



写真9 横方向にまとめた髪

しているが、整髪料やピン留めを用いなければ、そのようにはならないと言う。

髪を棒状にするには、撚りを加えたり、三つ編み等に編む方法があるが、これらの方法で棒状にした髪を頭頂部にのせても、髪の断面形は押し潰された団子状になってしまい、人面付き土器にあるような、シャープな感じがでない(写真7)。また、人面付き土器の「鶏冠」状突起の表面は平滑に表現されているが、実際の髪で棒状の束を作ると、表面には編み目や撚り目が見える。編み目や撚り目を隠すために、事前に取り分けた髪で棒状の髪を覆うと、編み目や撚り目は見えなくなるが、シャープな感じはさらになくなってしまう(写真8)。

また、温江遺跡出土の人面付き土器では、前頭葉の髪から額への移行は平坦であるが、人面付き土器で想定されるように、頭頂部の前方で髪を束ねて後方に折り曲げた場合、後方に強く髪を引いても額と髪の段差は消えない。逆に、後方で束ねて前方に折り曲げ、束ねた髪の毛先で段差を消すようにしても、やはり段差は残ったままである。

さらに、大阪府目垣遺跡にあるような、横方向にまとめられた髪形についてお訊きしたところ、髪を束ねて根元部分と髪先部分の2か所を両手で持って、髪の中に空気を入れて提灯のように円形に広げ、髪先部分の束をそのまま頭皮に押し当て、髪の根元部分で髪の大きさを調整することで、前頭葉から後頭部にかけて円板もしくは傘状を呈した廂状の髪形となる(写真9)。しかし、このやり方では、人面付き土器に見られるような廂状の髪の側面の鋭利な感じや凹凸は表現できない。

以上の理由のために、説明の妥当性という点と、髪形を作る上での技術的な点から考えると、人面付き土器の鶏冠状の突起は、当時の髪形を表現しているのではないと結論づけられるのである。(以下、次号)

(いわまつ・たもつ=当調査研究センター調査第2課第2係長)

注1 発掘された事例では、吉野ヶ里遺跡で弥生時代後期の男性の髪が残っており、美豆良であったらしい(佐原2003)。

注2 頭髪を洗わないと油っぽく「コテコテ」になり、いわば「整髪料」を用いたように髪形を自由に整えられると思われがちである。美容師の方にお訊きすると、これは食生活に起因するものであり、洗髪しなくても「サラサラ」な髪の方は実際におられ、おそらく植物性の食物を中心に摂っておられるのではないかとのことである。

平成 22 年度発掘調査略報

さんのみやひがしじょうあと
20.三ノ宮東城跡

所在地 船井郡京丹波町三ノ宮

調査期間 平成23年2月4日～3月4日

調査面積 200㎡

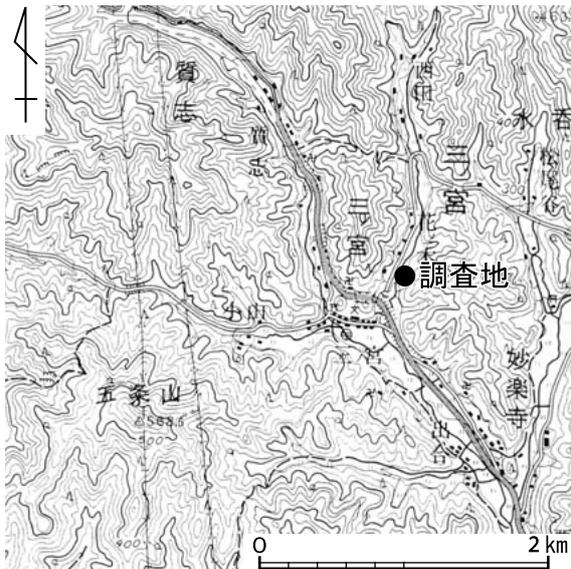
はじめに 三ノ宮東城跡は、山内盛豊ゆかりの中世山城と伝承される三ノ宮城跡の東側に位置する。少なくとも数基の曲輪（平坦面）が階段状に配置されている他、堀切、堅堀、土塁などの施設も確認することができる。最高所の主郭とみられる曲輪の標高は280～283 mを測る。

調査は国土交通省による丹波綾部道路の建設工事にとまなうもので、今回の調査地は、三ノ宮東城跡と、北西側、山塊の裾部にあたっている。標高は230m前後を測る。設定した調査区は、斜面地のなかに形成された狭い平坦部のA地区およびB地区、そして広い平坦面が階段状になっているC地区の3か所である。各地区は山城に関する遺構が存在すると思われた。

調査概要

A地区 細長い曲輪状の平坦面の一部を掘削した。表土である黒褐色腐植土より下層は黄褐色土が厚さ約30cmで堆積していた。黄褐色土の中には大小の自然礫が多く含まれており、転落石と考えられる。遺構・遺物とも確認できなかった。

B地区 幅2.5m、長さ20mほどの狭い平坦面である。幅2 m、長さ8 mの調査区を設けて掘削した。表土の黒褐色腐植土を除去すると、淡褐色土が約15cmの厚さでみられ、これより下層は地山(岩盤)面となった。30～40cm大の石の集積を2か所確認したが、表土の黒褐色腐植土にの



調査地位置図(国土地理院 1/50,000 綾部)

っていた。掘り込みや出土遺物もなかった。

C地区 まとまった平坦部がいくつかみられ、C-1区からC-4区までの4つの調査区を設定して掘削した。遺構が検出されたのは、最上部のもっとも広いC-4区と、その北西側に位置するC-1区の2か所である。C-1区からは、表土である黒褐色腐植土直下で、直径80cm、深さ20cmの円形土坑が1基検出された。15～30cmの大きさの礫が20個ほど混入していた。土器などの出土はみられず、時期や用途についてはわからない。

C-4区では、黒褐色腐植土の下層は褐色粘



写真1 調査地遠景

質土面となり、この面を精査した結果、円形土坑1基と、直径15~25cmを測る小土坑数基を検出した。円形土坑、小土坑とも明赤褐色の焼け土が周囲に見られ、火熱を受けている。円形土坑は直径60cm、深さ15cmで、その上面から石臼および近世陶器の破片が出土した。検出面では、江戸時代の陶磁器類の破片が出土しているが、平安時代とみられる須恵器片や中世の中国製磁器の破片も若干みられる。



写真2 C-4地区 全景

まとめ 今回の調査では、C地区から中世の遺物が若干出土しているものの、建物跡や柵列などは検出されなかったが、各地点とも小規模とはいえない平坦面が存在することが明らかとなった。

(黒坪一樹)

そのべじょうあと 21. 園部城跡

所在地 南丹市園部町小桜町97

調査期間 平成22年12月20日～平成23年3月3日

調査面積 600㎡

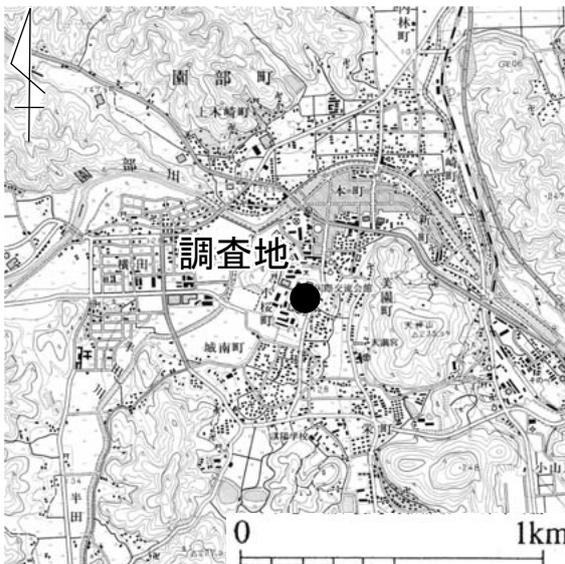
はじめに 園部城跡は、元和 7 (1621) 年に小出吉親により建てられた近世城郭である。文久 3 (1863) 年大規模な改築が行われるが、明治 5 (1872) 年に廃城となる。城跡の調査は過去 7 回実施され、石組溝、塀、井戸、堀などを検出している。また、埴輪を伴う方墳も確認している。当該地に府立園部高等学校校舎新築工事が計画されたことから、事前に調査を行い、遺跡の性格や広がりを確認することを主たる目的として実施した。

調査概要 調査地は、園部城本丸の北部分に相当し、調査地の中央部で東西方向の空堀 S D05 と土橋 S X04 を検出した。空堀の北側では土坑、柵、溝を確認し、空堀の南側では、石組溝 S D72 や溝 S D85、根石をもつ建物跡や土坑などを確認した。

空堀 S D05 幅12m、深さ1.3～1.8mを測る断面逆台形の東西方向の堀であり、延長18mを確認した。空堀の埋土から、幕末頃の陶器などが出土したことから、この頃に空堀は埋められたと考えられる。また、本丸外縁の石垣が直角に屈曲する部分に位置しており、築城時に計画的に掘られたことがわかった。

土橋 S X04 空堀の南側から北側に地山を削り残して造られた幅2.8m、高さ0.95～1.2m、延長7.8mの土橋である。北側 3m は切断されており、木橋が架けられていたと考えられる。

石組溝 S D72 南北方向の溝で幅0.6m、深さ0.45mを測り、延長15.4mを確認した。調査地の南側では、2段分の石組みが残っていた。この溝は、空堀 S D05 につながっており、空堀が埋めら



第 1 図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 園部)

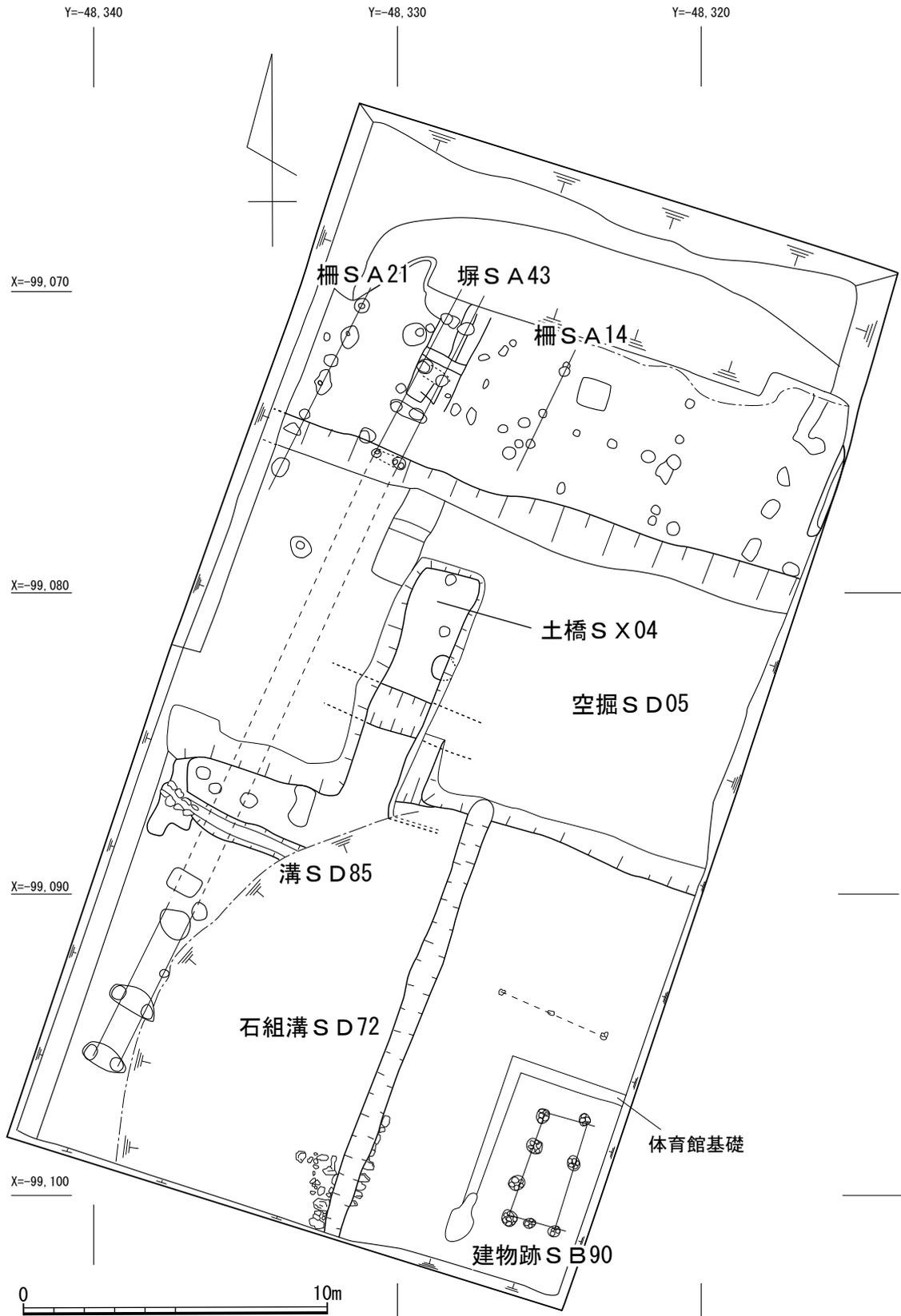
れるまで機能していたと考えられる。

柵 S A08 空堀に直交する柱列で、敷地内を区画する柵の可能性はある。

塀 S A43 1.7～2.0mの間隔で楕円形の穴を掘り、その両端に 2 本の柱を立てる構造で、南北に並んでいる。空堀を埋めた後に造られた、敷地を区画するための塀跡と考えられる。

まとめ 園部城は江戸時代はじめ頃に築城され、幕末には、大改修された。今回、この大改修の時に埋められたと考えられる幅12mの空堀が見つかった。

江戸時代の絵図に描かれていない空堀が確認



第2図 調査地遺構平面図

できたことで、本丸は江戸時代には少なくとも南北2か所の曲輪に分かれていたことが判明した。

(戸原和人)

やまぎきのつあと
22.山崎津跡

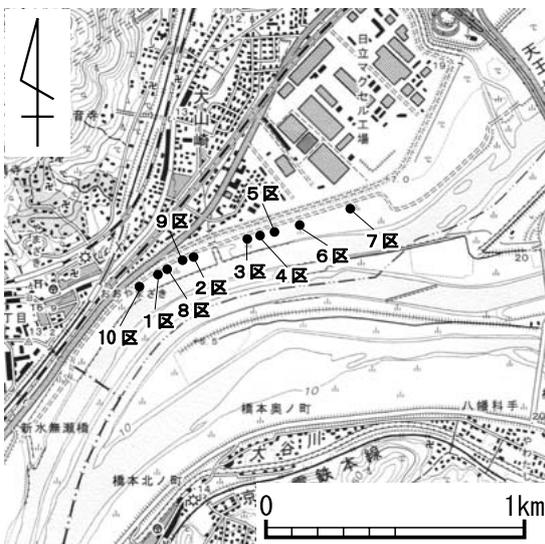
所在地 乙訓郡大山崎町大山崎

調査期間 平成22年12月14日～平成23年2月18日

調査面積 800㎡

はじめに 山崎津跡は、平安京の外港として文献にみえる「山崎津」と推定され、古代から近世にかけての淀川河川交通に関わる遺跡である。今回の発掘調査は、緊急用河川敷道路整備事業の計画に伴い、国土交通省の依頼を受けて実施した。

調査概要 平成22年度に京都府教育委員会による範囲確認調査が行われているが、今回の調査では、京都府教育委員会による2か所の調査地点の間(約500m)に10か所の調査区を設け、遺構や遺物包含層の有無を確認する目的で実施した。発掘調査は、南西部の1区から北東へ向け7か所の調査区を設定したが、1区で顕著な遺物包含層を確認したため、1区周辺にさらに8～10区を設定し、遺構や遺物包含層の広がり確認に努めた。1区(規模12m×8m)では、現地表面の標高約11.4mを測り、現地表面から約1mには客土及び攪乱土が堆積し、その下層に黄灰色・灰色シルト、灰黄色砂質シルト、青灰色砂質土～シルト、暗緑灰色・暗青灰色シルトの順に堆積する。表土下約5.0mの標高6.7mで、基盤層とした灰色・緑灰色粗砂を検出し、約1.5m以上の同層中の堆積が続くことを確認した。表土下約3.5mの青灰色シルト～暗緑灰色シルト層(厚さ約1.2m)から古代～中世の遺物が多量に出土した。出土遺物は12～13世紀の土器を中心とするが、わずかながら9～10世紀頃の土器も含まれる。2～7区では、近世の遺物が一部で出土したが、古代～中世の遺物包含層は確認していない。7区では、地表下1.8mで液状化による噴砂や堆積層の曲隆を確認し、層位および出土遺物から慶長・伏見大地震に起因すると考えられる。また、8～10区では少量ながら中世の遺物を包含する堆積層を確認した。



調査地位置図(国土地理院 1/50,000 京都西北部)

まとめ 今回の調査では、桂川と大山崎の市街地が最も近接する地点にあたる1区周辺において古代から中世の良好な遺物包含層を確認した。遺物には土師器、須恵器、緑釉陶器のほか、「大」と墨書された白磁底部や「由□」と線刻された文字瓦などが出土している。これらの遺物はほとんど摩滅していないことから、隣接地に港(津)に関わる施設、あるいは集落等があった可能性が高く、この周辺が古代から中世における「山崎津」の一角を占める地点であると推定される。

(高野陽子・奈良康正)

ながおかきょうあとうきょう まつだ
23.長岡京跡右京第1008次・松田遺跡

所在地 乙訓郡大山崎町円明寺松田・一丁田

調査期間 平成22年9月28日～平成23年3月9日

調査面積 1,150㎡

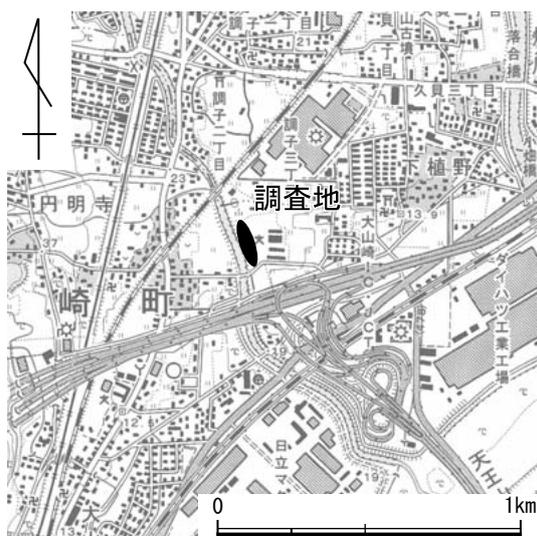
はじめに この調査は、府道大山崎大枝線道路新設改良工事に先立ち、京都府建設交通部より依頼を受け実施したものである。松田遺跡は、長岡京跡の南端、小泉川により形成された扇状地に広がる縄文時代から中世にかけての集落遺跡である。調査地周辺では、弥生時代中期の方形周溝墓が80基以上、古墳時代の竪穴式住居跡は中・後期を中心に60基ほど検出されている。

調査概要 平成22年に実施した右京第997次調査地の東側に設けた1トレンチと、平成21年度に実施した右京第971・974次調査地の東側に設けた2トレンチの2か所で調査を実施した。

1トレンチ 2時期の遺構面を検出した。第1遺構面(標高13.4m)では、右京第997次調査で検出していた建物跡と同時期と思われる溝2条・土坑2・素掘りの井戸3基・石組井戸1基のほか、多数の柱穴を検出した。そのほかに、平安時代前期の溝2条も検出した。その下約0.4mの第2遺構面では、古墳時代前期の竪穴式住居跡1基・柱穴を確認した。

2トレンチ 第1遺構面では、古代・中世の遺物を含む包含層のみを確認した。第2遺構面(標高12.4m付近)では、古墳時代前期の竪穴式住居跡4基、溝3条、柱穴を検出した。また、その下約0.2mの第3遺構面では弥生時代中期の竪穴式住居跡1基、溝1条などを検出した。

まとめ 1トレンチでは、隣接する右京第997次調査で確認されていた建物跡の東側を調査し、新たに井戸・溝・土坑などを検出した。これらの遺構は、13・14世紀を中心とした一連のものである。



東端で見つかった南北方向の溝は最も新しいもので(14世紀前半)、これらの遺構が廃絶した後の可能性もある。古墳時代前期の竪穴式住居跡SH50は規模が大きく、床面では貯蔵穴と思われる方形土坑2基を確認した。

2トレンチで検出された弥生時代中期の竪穴式住居跡の発見は、墓地と居住域を考えていく上で重要な資料となる。また、出土遺物に縄文時代晩期の土器も出土しており、周辺に当該期の遺構がある可能性があり、当地周辺が長く集落域として利用されていたことがうかがわれる。

調査地位置図

(国土地理院 1/50,000 京都西北部)

(増田孝彦)

むくのき 24. 椋ノ木遺跡第 9 次

所在地 相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木ほか

調査期間 平成22年 8 月20日～平成23年 3 月11日

調査面積 2,500㎡

はじめに 木津川左岸の自然堤防上に位置する縄文時代から中世にかけての複合集落遺跡である。これまでの調査によって縄文時代後期の土坑、弥生時代後期の大溝、古墳時代前・中期の竪穴式住居跡、中期の古墳、平安時代末から鎌倉時代の建物跡などのほか、条里制地割に由来する坪境溝や耕作溝群などが検出されている。

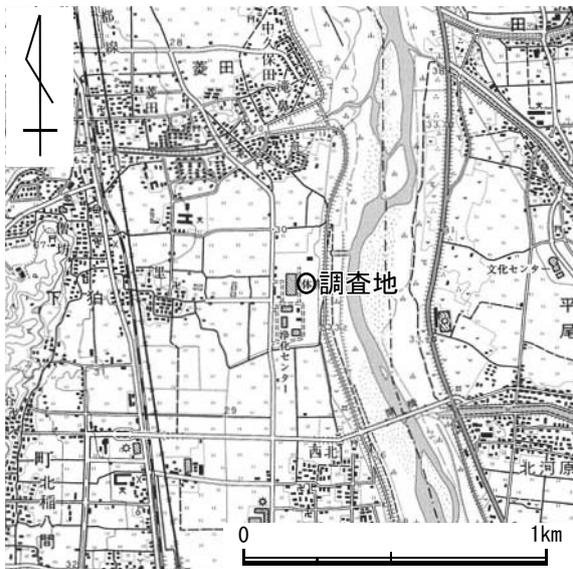
調査概要 地表面から約 3 m の深さで、平安時代から鎌倉時代の遺構を検出した。検出した掘立柱建物跡 S B 1・2 は、第 6 次調査で検出した掘立柱建物跡と同じ主軸方向や遺物から、平安時代中期(10 世紀中頃)に属すると考えられる。

調査地中央部では、幅 0.5～2 m を測る東西方向の溝が何度も掘り直された溝群を検出した。この溝群は、第 6 次調査で確認した条里制地割に由来する坪境溝の東延長部にあたる。

また、方形の土坑からは鎌倉時代(12～13 世紀頃)の瓦器皿 3 枚、土師器皿 3 枚が並べられた状態で出土した。

さらに 0.3 m 下で、縄文時代晩期～古墳時代中期末の遺構を検出した。

検出した古墳は 4 基あり、墳丘は削平され周溝のみが残っていた。古墳の周溝から須恵器、土師器、円筒埴輪の破片が出土した。遺物から古墳時代中期末(5 世紀末～6 世紀初頭)と考えられる。また、調査地の北側で竪穴式住居跡を 2 基検出し、うち 1 基は、古墳 S X 4 の削られた墳丘の下層面で検出した。さらにその下層で幅約 6 m、深さ約 1.5 m を測る弥生時代の溝を検出し、



調査地位置図(国土地理院 1/50,000 田辺)

弥生時代後期の土器が出土した。

まとめ 第 6 次調査で検出した掘立柱建物跡と同じ主軸をもつ掘立柱建物跡を新たに検出した。

また下層では、これまでの調査で確認した古墳を含めると 6 基になり、木津川の自然堤上に多くの古墳が築かれていたことがわかった。古墳時代中期の掘立柱建物跡や竪穴式住居跡が遺跡の南側で検出されており、南側が集落域であったと考えられる。

(村田和弘)

みのやまはいじかそう
25.美濃山廃寺下層遺跡

所在地 八幡市美濃山古寺

調査期間 平成22年12月9日～平成23年3月4日

調査面積 1,500㎡

はじめに 美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡は、弥生時代から古代を中心とする時期の遺跡である。このたび、新名神高速道路整備事業に先立ち、西日本高速道路株式会社からの依頼を受けて、事前に発掘調査を実施したものである。

美濃山廃寺は、奈良～平安時代前期の古代寺院である。八幡市教育委員会の調査によって、北、西、東の寺域がほぼ判明しているが、南側については不明な点が多い。今回の調査地点は、想定される美濃山廃寺の中心部から約200m南の丘陵上に位置し、寺域南限を示す遺構や、寺院に隣接する付属施設の検出が事前に想定された。

調査概要 現況の地形に合わせて、調査トレンチを数か所設定し、旧地形の復原と遺構の検出を試みた。調査前の地形は丘陵頂部に平坦面があり、北側の美濃山廃寺に向かって階段状に下がる地形である。平坦面上で、建物跡等の検出が期待されたが、明確な遺構は確認されなかった。出土遺物には古代の平瓦、丸瓦、須恵器、土師器が含まれている。当地点は、美濃山廃寺中央部よりも標高が高く、遺物の二次的な移動は想定しがたい。したがって、詳細は不明であるが、

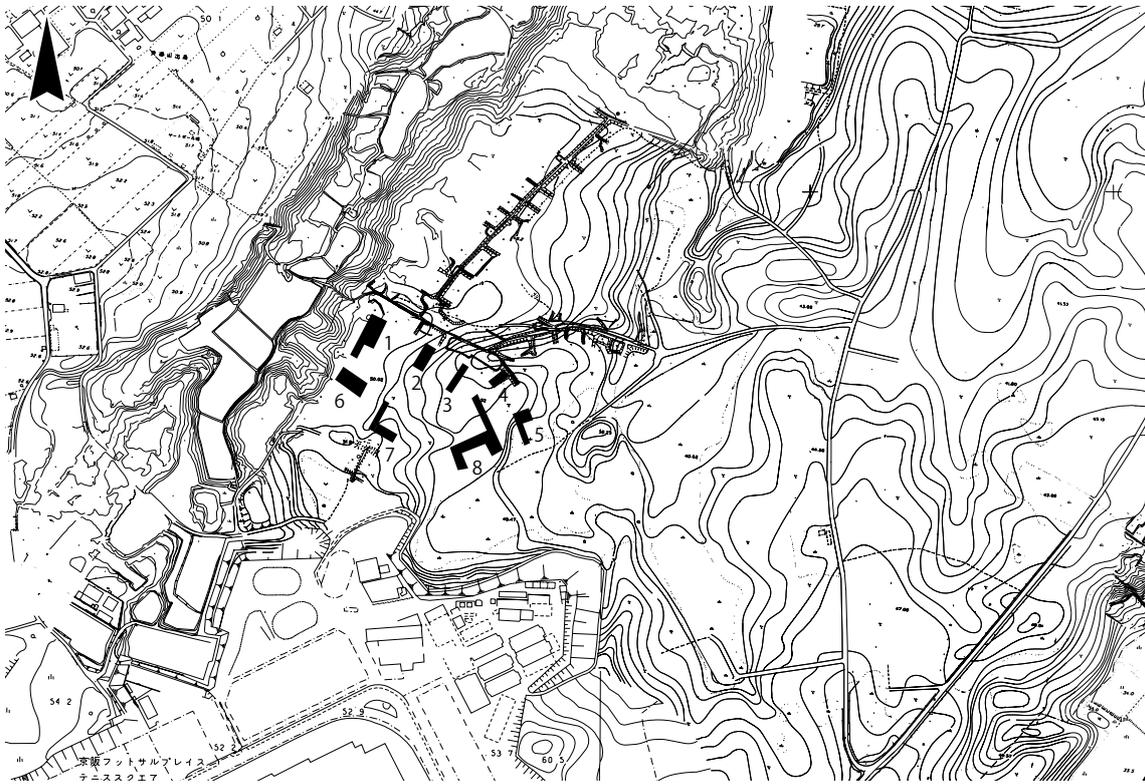


図 美濃山廃寺下層遺跡 平面図・調査地配置図



写真 7 トレンチ北東隅部土層堆積状況

美濃山廃寺と並行する時期の施設が、近隣に存在した可能性がある。

近隣の発掘調査の所見によると、美濃山廃寺周辺では、古代以降、ほとんど遺構、遺物が確認されず、江戸時代の享保年間になってから土地利用が再開されるようである。調査地一帯の丘陵上では、明治時代を中心に茶畑が営まれ、昭和以降は、竹林として活用されるようになる。今回の調査地でも、この所見を補強する結果が得られた。調査着手にあたって竹林を伐採したが、地表には、茶畑の経営に伴う階段状の地形が部分的に残っていた。また、表土直下には藪土が堆積するが、藪土より下位の堆積層は、地山を削って運ばれてきた客土で、丘陵の地形を一変させるような大規模な造成によって段々状の地形が成形された事を示している。客土からは、古代の瓦に混ざり、染付碗片等の近世後半の遺物が出土している。一帯の再開発の時期を示す資料である。

古代以前の遺物としては、後期の弥生土器が少量出土した。ローリングを受けている資料があり、近世段階の旧表土中に包含された遺物であろう。また、縄文時代草創期から早期のサヌカイト製尖頭器が出土している。周辺地域ではこの時期の調査事例が少なく、貴重な資料と言える。

まとめ 今回の調査では、縄文～弥生の遺物が出土し、近世以降の土地活用の履歴についても知見が得られた。しかし、古代の美濃山廃寺との関連を示す遺構や、寺域を区切る遺構は検出されなかった。

(古川 匠)

理化学分析と考古学

発掘調査をすると、いろいろなモノが出てきます。この中には見ただけで分かるもの、見ただけでは分からないものがあります。分からないものは、様々なことを手がかりに、それが何であるのかを探っていきます。それらの手がかりの一つに、理化学分析があります。

「自分を信じよう」は、亀岡市案察使遺跡の火山灰のお話です。早期の縄文土器が埋まった土の上に火山灰と思われる土がありましたが、火山灰分析をしても、火山灰ではないという結果となりました。調査者の経験から火山灰であることはほぼ間違いなく、他の研究者に分析していただくとガラス質が見つかり、やはり火山灰であることが明らかとなりました。客観的な理化学分析といえども、それを分析者の経験や熟練度が重要であることがわかります。

「縄文時代の食物」は、京丹後市網野町に所在する縄文時代前期の松ヶ崎遺跡のお話です。この調査ではヤマノイモ属の炭化物が見つかり、縄文人が根菜類を食していたことがわかりました。これ以外にも多種多様の遺存体が見つかりました。出土した微細な種子や骨から植物や動物の種類を特定し、それらの植物や動物がどういった時期・場所で採取できるのかを考察することで、当時の人々の食性や行動パターン、ムラの周囲の生態が見えてきます。

「『写し』の水田」は、京都市南区の長岡京跡・東土川遺跡で、弥生時代と推測される水田遺構を調査した時のお話です。イネ科の植物は、水分中の珪酸が細胞室内に蓄積され、珪酸体(プラントオパール)となりますが、この珪酸体はガラス質であるため土壤中によく残ります。この調査では、「水田遺構」を検出しましたが、土壤中からはイネ科のプラントオパールがほとんど見つかりませんでした。これらは水田遺構ではなかったのでしょうか。

「木樋について」は京丹後市網野町浅後谷南遺跡で検出した古墳時代前期の木樋のお話です。同様の遺構は各地で見つかっており、聖なる水を採るための装置と考えられています。また、木樋の周囲の土から寄生虫卵が検出されることから、糞便を流すための装置=水洗トイレであり、日本書紀や古事記の記載にある産屋であると考えられる研究者もいます。浅後谷南遺跡では、水洗トイレ説の可能性を探り、寄生虫卵の分析を行いました。否定的な結果となりました。

「奈良時代の寺と鞭虫卵」は、木津川市馬場南遺跡にあった「神尾寺」のお話です。この遺跡は、万葉歌木簡や三彩山水陶器、施釉陶器など、多種多様な遺物の出土で注目されていますが、建物は「仏堂」「礼堂」「塔」などしか確認されていません。広場を巡る川跡の理化学分析を実施したところ、埋土中から鞭虫卵が見つかりました。そのため、川の上流側に簡便な「厠」があったのではないかと推定されています。

理化学分析で対象とするのは花粉や種子、寄生虫など微細なモノがほとんどです。そういった小さな証拠を積み上げて、当時の社会を復原していきます。(岩松 保)

自分を信じよう（案察使遺跡） —火山灰分析—

地層の年代を決定する方法の1つに、広域火山灰を同定し時間軸を定める方法があります。火山灰には火山ガラスが含まれ、その屈折率がそれぞれ異なっていることを利用して、屈折率を測ることによって火山灰の同定をおこないます。

平成16年度の亀岡市案察使遺跡の発掘調査で、縄文時代早期の押型文土器を包含する層の上層から、厚さ5～10cmの火山灰層を発見することができました。

近畿地方ではこうした厚い単一の火山灰層は始良Tn火山灰（約25,000年前）かアカホヤ火山灰（約7,300年前）であることが多く、遺物との関係からアカホヤ火山灰と想定して分析を依頼しました。すると、火山灰ではないという結果が戻ってきました。

私は学生時代長期にわたり九州の火山灰地域で発掘調査をしていた経験から、「これが火山灰でないなんてありえない」との思いを、知り合いの火山灰の研究者に告げたところ、「それはたぶんあれだと思いますよ」と笑みを浮かべられ、「火山灰を少しください」といわれました。

分析をしていただいた結果、その火山灰はおきょうつりょう隠岐鬱陵火山灰（約10,700年前）とわかりました。「隠岐鬱陵火山灰は風化しやすくガラス検出が難しいのですよね。この地域に精通していれば、火山灰に違いないのに、ガラスが出ないというところでピンと来たでしょうけど」といわれていました。

最初に同定をお願いした機関にサンプリング資料を再度検討することをお願いすると、大量の資料を処理すると隠岐鬱陵火山灰のガラスが少量出てきたということでした。

あの時自分の経験を信じなければ、火山灰は幻に終わったことになったでしょう。

（中川和哉）



写真1 案察使遺跡第5・6次調査地全景



写真2 案察使遺跡第3トレンチ東部



写真3 縄文時代押型文土器

縄文時代の食物（^{まつがさき}松ヶ崎遺跡）

平成9（1997）年に京丹後市網野町で縄文時代前期の^{いしがこいろ}石囲炉と、たくさんの遺物が検出されました。松ヶ崎遺跡は、日本海側で三大砂丘に数えられる丹後砂丘の後背地にあたり、古砂丘の二次堆積に覆われた地層は地表下3.6m（海拔0.8m）で出土した炭をAMS法による放射性炭素年代測定を行なった結果、補正¹⁴C年代（年B. P.）で、 5730 ± 50 と 5790 ± 50 の、約6,000年前のものであることがわかりました。また、古砂丘の層からは、約6,300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出したアカホヤ火山灰（K-Ah）と、約2.4～2.5万年前に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT）が検出され、大山火山起源の火山灰の可能性のある角閃石も検出されました。

この地層で出土した土器は、新形式のもので、縄文地に刺突文を施す精製の山形口縁キャリパー形土器と、粗製の平口縁砲弾形土器などによって構成され、羽島下層Ⅱ式に先行する型式（松ヶ崎式土器）と考えられます。

このほかに、漁労具の石錘、調理具の石皿・敲石、木製品では伐採具の石斧柄が出土しています。

縄文前期の腐植土層から出土した有機質の遺物では、マダイ、クロダイなどのハタ科魚類にはクエに相当する体長1mはあろうかという大型のものから、2～30cmの小型のものまで複数種があります。大型のハタ科魚類は岩礁性で、コブダイ、イサキも沿岸の岩礁域に生息する魚種であり、ヒラメ、コチなど砂底に生息する魚類も捕獲しており多様な海域を漁撈の場としていたことがわかります。哺乳類・鳥類では、ニホンジカ、イノシシ、ニホンザル、ムササビ、オシドリが少量ずつ出土しています。骨角器の素材となった鹿角も出土しています。

植物では、草本類のオニバス、エゴマ、ヤマノイモ属、ヒョウタン仲間があり、木本類では、オニグルミ、カラスザンショウ、サンショウ、ミズキなどがあります。これら出土した植物遺体のほとんどが、食用とされる種類です。縄文時代に根茎類が利用されていた可能性はこれまでも指摘されていましたが、ヤマノイモ属の炭化イモの出土は初めてです。この炭化イモは長軸1.8cm、短軸1.2cm、ジネンジョ（自然薯）などのツルの葉腋にできる球芽で、ムカゴ（珠芽）と呼ばれ食用になります。

松ヶ崎遺跡から出土した多量の堅果類や石皿・敲石からは縄文前期の植物食と調理の状況が、



写真 出土したムカゴ(左)と糞石(右)

獣・魚骨や石錘からは狩猟・漁労の実態の一部が明らかになってきました。漁労では、採取された骨から一年の各季節の魚がおこなわれていたことがわかり、一緒に出土した糞石の分析によると、食事の中に占める魚食の割合が極めて高いという結果が出ています。（戸原和人）

「写し」の水田（長岡京跡・東土川遺跡）^{ひがしつちかわ}

名神高速道路上り線の桂川パーキングエリアの建設に伴い、平成7(1995)年度に長岡京跡右京二条三坊十五町・東土川遺跡を調査しているときでした。検出した多くの遺構の中で、「遺構」と呼んでいいのかどうか、今でも判断に迷うものがあります。

調査は順調に進み、長岡京期の条坊側溝や掘立柱建物跡、井戸跡などを調査しました。この調査地は東西150m、南北100mと広大で、調査地全体を1枚の写真に収めるには、高高度から撮影する必要がありました。そこで業者に委託し、ヘリコプターで写真撮影を行いました。

さて、数週間後にその成果品が納品されたときでした。写真にぼんやりと数m四方の網の目状の長方形区画がぼんやりと白く写っているのが認められました。それぞれの方形区画は幅数十cmの細長い帯で囲われていました。「?・・・。水田跡?」。数年前に当調査研究センターは八幡市内里八丁遺跡で弥生時代の水田跡を調査しており、その遺構とよく似ていたのです。

写真を片手に数人の調査員と意見を交わしつつ調査を進めると、何とか色の違いがわかるようになり、最終的には、幅数mの道が二股に分かれ、そこに畦畔が網目状に作られており、その内側が稲を作る水田と判断しました。

色の違いを見分けることができればこちらのものです。埋土を掘削して、水田の底面を出していく作業です。ところが、ここで問題が起きました。どこが水田の底面なのか、で調査員の意見が異なったのです。ある調査員はある高さで土の硬さが異なると言いますし、ある者は違った深さで土の色が異なると言います。しかしある調査員は、色・硬さ・締まり具合がどこまで掘っても変わらないと言います。実際、掘削土から土器是一片も出土しません。しかし、平面的には土色の違いが異なるので、一部の調査員は納得のいかないまま、遺構を掘り下げていきました。

さて、何とか調査も終了し、水田と畦畔の理化学分析—花粉分析とプラントオパール分析の結果が届きました。通常の水田遺構とは考えられないほどにしか、花粉もプラントオパールも含まれておらず、とうてい、水田とは考えられないという結果でした。なぜ、このようになったのでしょうか。本当のことは今もってわかりませんが、本来は上位にあった網目状の水田の形状が、雨水や耕作の水の染み込みにより下位の地層に「転写」し、水田遺構自体は削平のためになくな



写真 「写し」の水田遺構

ってしまったと考えました。遺物が出土せず、「底面」もよくわからないことも、これで説明できます。もしそうならば、本当の意味での遺構とは言えないでしょうが、土色が異なっているという点で「遺構」と言うことも可能です。

今でも当時の調査員と振り返ることがあります。「あれは遺構であったのか、なかったのか」と。

(岩松 保)

木樋について あさごだにみなみ（浅後谷南遺跡）

平成9年、京丹後市網野町浅後谷南遺跡から特異な形状の木樋が出土しました。一木造りで、長さ3.5mで中間部に0.6×1.1mの水貯め用の槽をもち、前後に長く樋がのびています。造られた時期は古墳時代前期(4世紀)です。形状的には奈良県明日香村の酒船石に彫刻されたものと酷似しています。

古墳時代におけるこのような樋と槽の組み合わせられた木樋は、他にも奈良県南郷大東遺跡や纏向遺跡などで知られています。

用途については、田にもたらされる水を象徴し、農作物の豊穰を祈る場のための仕掛けと考える説や、治水を統治の使命と考える首長が濾過と沈殿を繰り返し清澄な水を取り、沐浴や禊の儀式を執り行ったとする説があります。とくに後者の説は有力で、各地の首長がその権威をさらに高めるための舞台装置として、このような導水・浄水施設を利用したようです。

さらに古墳からも木樋を模したとみられる「舟形土製品」(加古川市行者塚古墳)や「柄杓状土製品」(藤井寺市狼塚古墳)、「槽・樋形土製品」(城陽市芝ヶ原10・11号墳)が出土しています。狼塚古墳の囲み形埴輪の内側は、石敷きの豪族居館とされる三ツ寺I遺跡(群馬県)の石敷き祭祀遺構をも彷彿とさせ、その中心に置かれた「柄杓状土製品」は南郷大東遺跡の木樋にそっくりです。こうした埴輪内の出土状況は、木樋の用途が水辺の祭祀にかかわる非常に清らかなイメージを抱かせます。

一方、先述の南郷大東遺跡と纏向遺跡の周辺土壌から寄生虫卵が出土したことで、古事記における祭場に糞便をする行為(屎戸)の記載などから提唱されたのが木樋水洗トイレ説です。木樋内の土から寄生虫卵が大量にみつかったわけではないので、トイレと木樋の使用時期が異なる可能性もあります。

浅後谷南遺跡の木樋内には泥土はなく砂粒がつまっていた。また、上流の溝(S D2012)の土からは、分析の結果、まったく寄生虫卵は見つかりませんでした。

ただ、木樋内の砂や樋の下流の土を直接分析していないので決着はつきませんが、浄水を採取するための木組みや多くの祀りにかかわる木器や桃の果核の出土状況から、必ずしも木樋=トイレとは断定できません。

(黒坪一樹)



写真 浅後谷南遺跡出土の木樋

奈良時代の寺と鞭虫卵（馬場南遺跡）

厠^{かわや}という言葉があります。これは川の上に掛けて作った屋の意味で、いわゆる便所のことです。もともとはお寺にあった施設のことを言いました。

さて、京都府木津川市馬場南遺跡で、未知の奈良時代の山林寺院「神雄寺」が発見されました。ここでは三彩の香炉や壺、彩釉の山水陶器、平城宮式瓦、楽器である鼓胴を始め、万葉歌が書かれた特別な木簡が出土し、さらには、5,000枚以上の灯明皿も出土しました。この地で大規模な法要が営まれたことが窺えます。そもそも、「神雄寺」という読みは、伊藤 太氏の詳細な検討によれば「カムオウ」で、これは神の宿る山の麓の意味なのです。『続日本紀』天平17(745)年9月19日条の「天皇不予。京・畿内の諸寺および諸名山淨処で薬師悔過^{けか}をおこなう」という記事は、聖武天皇の体調がすぐれないので、各所で薬師経を読経する法要を行ったとの記事なのですが、「神雄寺」で行われた法要がこの記事に対応する可能性があります。

以上のような多種多様な遺物に比べて、遺構は簡素なものでした。掘立柱建物跡が2棟、礎石建物跡が2棟、そして、井戸が1基存在したに過ぎません。中心的建物を巡るように川S R01がありました。さて、発掘調査で見つかった川S R01(奈良時代後期に人工的に狭められたSD01と重複)から土壌を採取し、化学分析を試みました。採取場所は3か所です。1か所目は、掘立柱建物跡1のすぐ横です。分析結果は、生活汚染程度の鞭虫卵が検出され、近隣に生活域があったことが判明しました。2か所目は川の中央部です。川はそれまで直線的で「L」字状に屈折して中央部まで流れていました。そこから西側は「S」字状に曲がり、曲水の宴を彷彿とさせる状況でした。土層断面からゆっくりと堆積したことが認められました。このすぐ西側に堤があり、ここで水の流れを止める施設があったのです。分析結果は森林に囲まれていたことと、溝は止水性の滞水域であったことがわかりました。そして、3か所目は堤を越えた西部の歌木簡出土層です。ここで、奈良時代中期に比べて後期には森林が減少し、そのかわりに草木類が増えていることが判明しました。滞水する河川ではなかったのです。これらの成果を基に、「神雄寺」周辺の奈良時代の景観を復原しましょう。まず中期は森林が豊かな中に建物が点在し、そのすぐ横を川が流



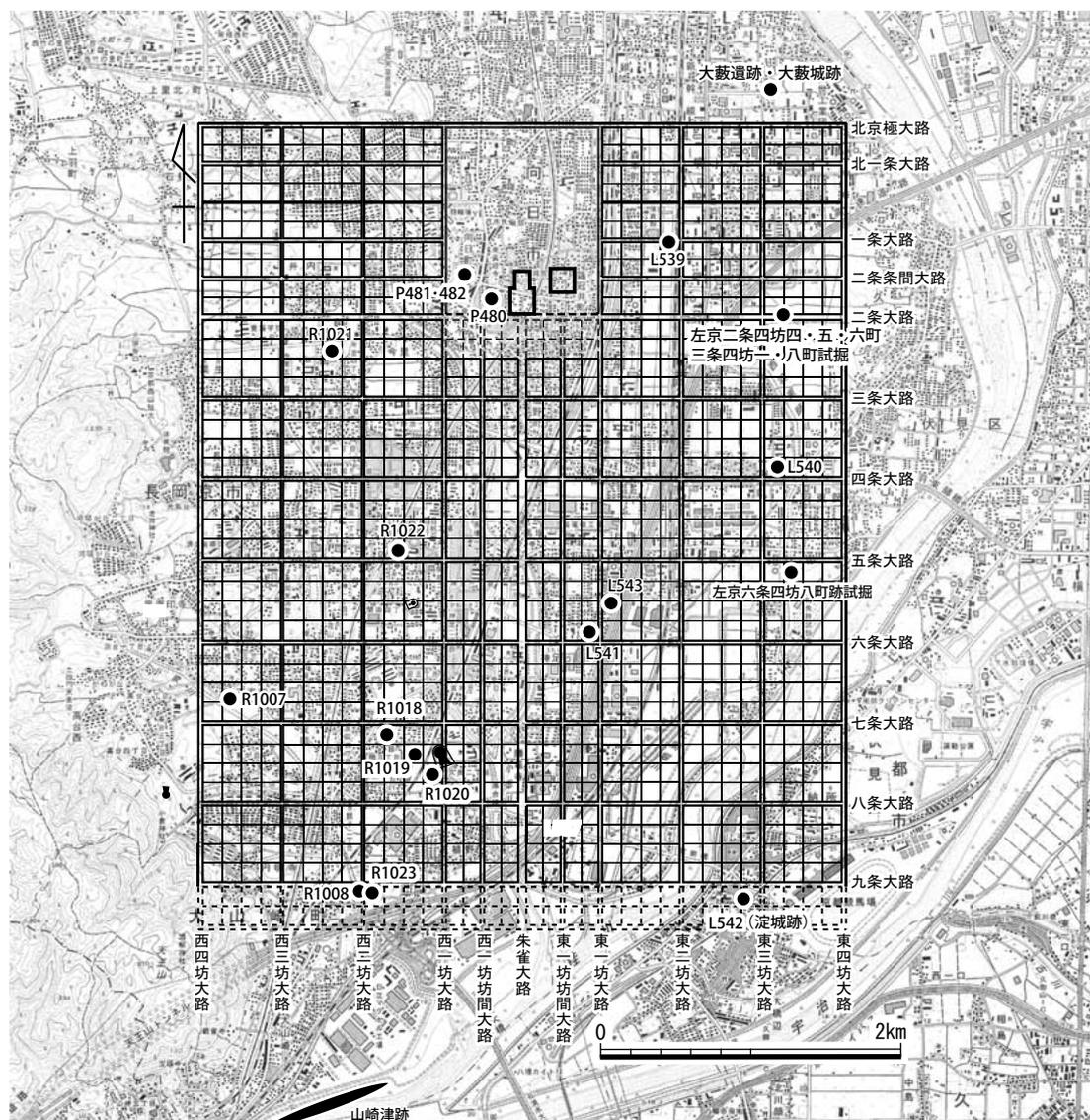
写真 鞭虫卵顕微鏡写真

れていました。ここで、鞭虫卵が確認されたことから、ここかもしれない少し上流に厠があったことがわかります。川の中位では、水が溜まった状態であったことがわかります。おそらく、堤によって池のようになっていたのでしょう。堤の北方には小さな塔があったことが、木津川市教育委員会の発掘調査で確認されました。塔から見下ろせば、そこには池があったのです。堤を越えた平野側には草が茂り少量の川水が流れていたようです。森の中の山林寺院という閉ざされた世界から堤を境に平野を見渡せる開放的な世界に代わる様がわたしたちの脳裏に浮かんでくるようです。

(伊野近富)

長岡京跡発掘調査の情報交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成23年2月から平成23年5月の例会では、宮域3件、左京域5件、右京域9件、京域外7件、あわせて30件の調査報告があった。そのなかで、主要な事例について報告する。

宮域 宮跡第482次調査(向日市向日町)では、宮跡第481次調査(向日市向日町)で検出した複廊の石組み溝の残存する石材を取り外したところ、東西方向に石列が検出された。掘形内に礫が配置されていることが判明した。



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

左京域 左京第539次調査(向日市鶏冠井町)では、一条大路の南側溝の調査を行った結果、南面する宅地(十二町)の東西中軸線位置に橋が設けられていたことが判明した。付近では墨書人面土器や土馬などが出土しており、橋の付近で小規模な祭祀を行っていたと考えられる。また、一条大路の埋没過程の検討から、道路や周辺の宅地の性格が側溝の規模や維持管理の実態を反映していたことが明らかとなった。

左京第541次調査(長岡京市神足)では、六条大路北側溝と掘立柱建物跡、土坑等が検出された。六条大路北側溝の北側には屋敷の内溝があり、両者をつなぐと考えられる溝も確認された。出土遺物には「厨」・「大」などの墨書土器がある。

左京第542次・淀城跡調査(京都市伏見区)では、淀城前期・後期の路面や京口門跡、角櫓の石垣等が検出された。

左京第543次調査(長岡京市神足)では六条条間小路北側溝・南側溝、掘立柱建物跡、土坑、東西小溝群などが検出された。東西小溝群は長岡京期であるが建物より古い。掘立柱建物跡の中には甕据え付け穴をもつ建物もある。出土遺物には瓦、土師器、須恵器のほか墨書土器や製塩土器、土馬、漆器、桃種子などがある。そのほか、断ち割り等から弥生時代前期及び中期の土器が出土している。

右京域 右京第1023次・松田遺跡(大山崎町円明寺)の調査では、掘立柱建物跡・溝・竪穴式住居跡・流路等を現在調査中である。掘立柱建物跡の方向はほぼ正方形で、長岡京期のものと考えられる。調査地は長岡京跡復元の外側に位置する。右京368次調査で確認された建物群との関係も含めどのような性格のものか検討が必要である。

京域外 大藪遺跡(京都市南区)の調査では、現在の集落の前身である室町時代の大藪集落の東堀や長岡京東四坊坊間西小路延長の西側溝・東側溝にあたりと考えられる溝が検出された。室町時代の堀からは瓦器や焼締陶器のほか、漆器や植物遺体・昆虫遺体などが出土している。

勝持寺旧境内遺跡(京都市西京区)の調査では、室町時代の石垣の裏込め土中から石積みが確認された。石垣の造成土が前方にずれるのを防ぐためのものと考えられている。造成途中で土師器皿の多量投棄が2回行われており、儀礼的な行為が想定される。また、多量投棄された土師器皿の年代から石垣が15世紀後半に構築されたことが判明した。

山崎津跡(大山崎町大山崎)の調査では、近世から明治の大溝が検出された。溝は幅8m、深さは1.5m以上である。調査地は明治の地積図で確認できる「えあれ沼」から悪水を抜くために掘削された溝とほぼ重なることから、検出した大溝はこの悪水抜き溝であると考えられる。

(松尾史子)

普及啓発事業(3月～6月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業(体験学習)等の普及啓発活動を行っています。

埋蔵文化財セミナー

第117回埋蔵文化財セミナー「山城地域の調査成果－都の造営とその後－」は、平成23年3月5日(土)に長岡京市産業文化会館で実施しました。京都府教育委員会藤井整氏の「恭仁宮跡の調査成果－大極殿院と朝堂院－」の報告は、新たな柱穴の検出により、宮の中枢部の構造が解明されるという興味深いものでした。続いて、長岡京市教育委員会の山本輝雄氏による「長岡京と古墳－都造りと古墳の扱いについて－」では長岡京造営に伴い古墳がどのように扱われたかを検討され、古代人の古墳に対する考えに言及されました。また、当調査研究センター岡崎研一専門調査員からは「平安時代後期の居館の調査－長岡京市下海印寺遺跡の調査から－」と題して、平安時代の方形居館の詳細な検討がなされました。

当日は、天候にも恵まれ、83名の参加者を得て、盛況裏に終えることができました。



第117回埋蔵文化財セミナー(於：長岡京市)



第118回埋蔵文化財セミナー(於：宮津市)

第118回埋蔵文化財セミナー「丹後地域の調査成果－近年話題をあつめた遺跡から－」は平成23年6月5日(日)宮津市みやづ歴史の館の文化ホールを会場に実施しました。宮津市教育委員会の河森一浩氏から「宮津市成相寺旧境内の調査－古代・中世の山岳寺院の分布調査とその展望－」と題し、天橋立を見下ろす景勝の地に営まれた成相寺の発掘調査成果を総合的に分析し、その創建が古代にまで遡ることを示されました。続いて、当調査研究センター前職員の辻本和美氏により「京丹後市大内北古墳群の調査－古墳時代の特色ある埋葬施設－」と題して、多種多様な埋葬施設が検出された大内北3号墳の成果を中心に紹介され、その特質に言及されました。また、当調査研究センター伊野近富次席総括調査員は、「舞鶴市中山城跡の調査－戦国期の山城の防御施設と宴の場－」と題し、山頂部に営まれた曲輪の調査成果にふれつつ、文

献史料との照合も含め、その歴史像を大胆に復元されました。

当日は、あいにくの小雨模様の中、61名の参加を得て無事終了することができました。

出前授業（体験学習）

地域の歴史を素材に、児童・生徒の社会科授業の一助にさせていただくことを目的に、出前授業や発掘調査体験を実施しています。

3月2日(水)には、京都府立園部高校附属中学校において、中学2年の社会科授業の特別講義に当センター職員が講師として派遣され、平成22年度の園部城跡の調査を説明しました。

5月13日(金)には、府立南丹高等学校3年生の日本史授業の中で、「原始・古代の亀岡」と題して出前授業を行いました。亀岡盆地の調査成果を紹介するなかで出土遺物を生徒が直接触れる等、体験学習的なものとなりました。

6月14日(火)には、笠置小学校で小学6年児童を対象に、社会科歴史学習の一環として、「ふるさと笠置」を題材とした体験学習を実施しました。

大阪大学文学部文学研究科考古学研究室の施設見学

5月11日に、当調査研究センターの施設見学が行われました。センター内の各部署の詳細を紹介することを通じて、当センターの役割と機能、調査研究の流れを理解していただきました。

(伊賀高弘)



京都府立園部高等学校附属中学校出前授業



京都府立南丹高等学校出前授業



相楽東部広域連合立笠置小学校出前授業



大阪大学考古学研究室施設見学

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧

(平成 23 年 7 月 1 日現在)

評議員	事務局長	小池 久
芦田富男	副局長	安田正人
(長岡京市教育委員会教育長)	総務課	安田正人(兼)
奥原恒興	課長補佐	杉江昌乃
(京都府商工会議所専務理事)	総務係長	今村正寿
宮野文穂	主事	鍋田幸世
(京都府教育庁教育次長)	主事	葛本慎太郎
	調査第 1 課	水谷壽克
	課長補佐	岸岡貴英
	企画係長	岸岡貴英(兼)
	主査調査員	伊賀高弘
	資料係長	岸岡貴英(兼)
	主任調査員	田中 彰
	調査員	松尾史子
	副主査	小山雅人(再雇用)
	調査第 2 課	水谷壽克(兼)
	課長	石井清司
	主幹	小池 寛
	課長補佐	小池 寛(兼)
	調査第 1 係長	引原茂治
	主任調査員	竹原一彦
	主任調査員	黒坪一樹
	専門調査員	柴 暁彦
	主査調査員	高野陽子
	調査員	加藤雅士
	調査員	牧田梨津子
	調査第 2 係長	岩松 保
	主任調査員	戸原和人
	主任調査員	増田孝彦
	主任調査員	中川和哉
	専門調査員	岡崎研一
	調査員	奈良康正
	調査員	古川 匠
	調査第 3 係長	石井清司(事務取扱)
	次席総括調査員	伊野近富
	次席総括調査員	田代 弘
	専門調査員	石尾政信
	調査員	筒井崇史
	調査員	村田和弘
	調査員	関廣尚世
	調査員	大高義寛
	調査員	山崎美輪
理事長		
上田正昭		
(京都大学名誉教授)		
常務理事		
小池 久		
理事		
中尾芳治		
(恭仁宮跡調査専門委員会委員長)		
石野博信		
(兵庫県立考古博物館長)		
井上満郎		
(京都産業大学名誉教授)		
都出比呂志		
(大阪大学名誉教授)		
中谷雅治		
(元京都府教育庁指導部理事文化財保護課長事務取扱)		
高橋誠一		
(関西大学文学部教授)		
増田富士雄		
(同志社大学理工学部教授・京都大学名誉教授)		
上原真人		
(京都大学大学院文学研究科教授)		
磯野浩光		
(京都府教育庁指導部文化財保護課長)		
監事		
清水浩平		
(社団法人全国国宝重要文化財所有者連盟庶務部長)		
橋本幸三		
(京都府教育庁管理部長)		

センターの動向

(平成23年3月～6月)

月日	事項
3 2	園部高校付属中学校(於:南丹市)出前授業 戸原和人主任調査員、伊賀高弘主査調査員講師派遣
3	園部城跡(南丹市)発掘調査終了(12/20～)
4	当センター職員(事務職員)採用選考試験(第一次)
5	第117回埋蔵文化財セミナー(於:長岡京市産業文化会館 参加者83名)
6	当センター雇用期間付職員(技術職員)採用選考試験。スライドでみる乙訓の発掘(於:大山崎町)岡崎研一専門調査員派遣
9	上粕北遺跡(木津川市)発掘調査終了(8/23～)
10	二府一県会議(於:滋賀県)肥後弘幸調査第1・2課長、小池寛調査第2課課長補佐、岩松保資料係長、筒井崇史調査員出席
11	椋ノ木遺跡(精華町)発掘調査終了(8/20～)
14	当調査研究センター職員(事務職員)採用試験(第二次)
16	長岡京連絡協議会
25	第93回役員会・理事会(於:ルビノ京都堀川)上田正昭理事長、小池久常務理事・事務局長、井上満郎・都出比呂志・中谷雅治・増田富士雄・藤井貢・高熊秀臣・川村智各理事、清水浩平・橋本幸三監事出席
29	京都府知事より公益財団法人としての認定を受ける
31	理事退任(別掲)、退職職員辞令交付(別掲)
4 1	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターに名称変更。採用職員辞令交付(別掲)。評議員就任(別掲)
4	新規採用職員研修開始(~4/14)
6	長岡京跡ほか(長岡京市)発掘調査開始
14	新規採用職員研修終了(4/4～)
19	松田遺跡(大山崎町)発掘調査開始
20	長岡京連絡協議会(於:当センター)
21	三ノ宮東城跡ほか(京丹波町)発掘調査開始。美濃山廃寺下層遺跡ほか(八幡市)発掘調査開始
25	木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査開始
26	山崎津跡(大山崎町)発掘調査開始
27	職員人権研修「平成23年度の人権に関する係目標と個人目標の設定と発表」
5 11	大阪大学文学部考古学研究室約20名当調査研究センター施設見学
13	南丹高校出前授業(於:亀岡市)岸岡貴英調査第1課課長補佐兼企画係長兼資料係長講師派遣
17	全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於:東京)小池久常務理事・事務局長、安田正人

- 副局長兼総務課長出席
- 25 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 6 1 乙訓地域の首長墓群の歴史的位置付けに関する検討会(於：当センター)
- 5 第118回埋蔵文化財セミナー(於：宮津市、参加者：61名)
- 7 監事監査(事前補助監査、於：当センター)
- 8 京都府企業内人権問題啓発セミナー 杉江昌乃総務課課長補佐出席
- 10 監事監査(監査・講評)
- 13 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター第1回理事会(於：ルビノ京都堀川)
上田正昭理事長、小池久常務理事・事務局長、中尾芳治・石野博信・井上満郎・都出比呂志・中谷雅治・高橋誠一・増田富士雄・上原真人・川村智各理事、清水浩平・橋本幸三監事出席。理事退任(別掲)。
- 14 笠置小学校出前授業(於：笠置町)小池寛調査第2課課長補佐兼第1係長講師派遣
- 16 第32回全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(於：高知県)小池久常務理事・事務局長、安田正人副局長出席(~6/17)
- 22 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 28 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター第1回評議委員会(於：ルビノ京都堀川)、芦田富男・奥原恒興・宮野文穂各評議員出席、理事就任(別掲)

月 日	事 項
3 31	高熊秀臣 (京都府教育庁指導部長)理事退任
	藤井 貢 (京都府文化環境部文化芸術室長)理事退任
	辻本和美 調査第2課次席総括調査員退職
	竹井治雄 調査第2課専門調査員定年退職
	肥後弘幸 調査第1課長兼第2課課長退職(府派遣解除)
	須田千春 総務課主事退職(府派遣解除)
4 1	芦田富男 (長岡京市教育委員会教育長)評議員就任
	奥原恒興 (京都府商工会議所専務理事)評議員就任
	宮野文穂 (京都府教育庁教育次長)評議員就任
	岸岡貴英 調査第1課課長補佐兼企画係長兼資料係長採用(府派遣)
	葛本慎太郎 総務課主事採用(新規)
	加藤雅士 調査第2課調査第1係調査員採用(新規)
	牧田梨津子 調査第2課調査第1係調査員採用(新規)
	関廣尚世 調査第2課調査第3係調査員採用(新規)
	大高義寛 調査第2課調査第3係調査員採用(新規)
	山崎美輪 調査第2課調査第3係調査員採用(新規)
	小山雅人 調査第1課副主査採用(再雇用)
6 13	川村 智 (京都府山城教育局長)理事退任
6 28	磯野浩光 (京都府教育庁指導部文化財保護課長)理事就任

編集後記

情報第 115 号をお届けします。

東日本大震災が発生して以来、数か月が過ぎました。震災によりなくなられた方々のご冥福を謹んでお祈り申し上げますとともに、被災された多くの皆様に心よりお見舞い申し上げます。また、被災地におきましては、一日も早い復興と皆様のご健康をこころからお祈りいたします。

なお、当調査研究センターは、平成 23 年 4 月 1 日をもちまして、新たに公益財団法人としてスタートすることになりました。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

(編集担当 伊賀)

京都府埋蔵文化財情報 第115号

平成 23 年 8 月 31 日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141